俳諧發句歌集
へ 5
4429
2

門へ5
4429
2
昭和九年九月二九日 購求

御製夏句題百首 夏之上

四月初 卯月
治 白重 六
書簾 筑紫
子園子 灌仏
竿鄰竭 夏籠
交新 交行
凡炉 書
麦秋 十 藤麦 十二
苞藥 十五 燕子花 十六
更衣 二
交衣
簀垂 七
花橘 八
交花 九
黄酒
鄰 十
書筒
花簀 十八
祭 十四
茅巻
苑米
花菖蒲
交書
古茶
松魚
牡丹 十三
玉巻蕉

培堂

玉蕊芭蕉 十九
豆花
躑躅花
卯花腐 曲
梔若葉
実櫻
竹落葉
梔穀花
穀樹
茶子
蕎麦

紫羅傘 一千八百
凡車
美人草
若楓
若葉花
木茂 廿八
桐花
梔花
接木花
荀 卅一
郭公 卅三
鬱蒸 二十
石蕗
菜摘草
若葉
夏葉
太下周
柚花 廿九
繡毬花
花茶子
藤子 廿二
常盤木落葉
夏山
白丁花 三十
茶子
蕗
老鶯 四十一

芭蕉 廿二
茨花
卯花 廿三
蕗花 廿七
菜摘
常盤木落葉
夏山
白丁花 三十
茶子
蕗
老鶯 四十一

カンコトリ
閑古鳥 四十二
鶯入城
蝉
飛蟻
牡丹花
夏くさ中
五月 五十一
菖蒲湯 五十三
菜玉
柏餅 五十四
菜日

鶏 四五
養蜂
牡丹
鼓蛙 四十八
夏くさ中
菖蒲
菖蒲湯
布地手
懸
加茂競馬

刈葦鶯
梭蛙 四七
子子
鳴牛 四九
夏くさ中
菖蒲賣 五十二
菖蒲刀
百姓蔵
刈菰 五十五
竹醉日 五十六

ヨシキリ
葭刈 四六
養
水馬
軸蛙 五十
夏くさ中
軒菖蒲
菖蒲手
粽
菜摘
花菖蒲

石菖蒲
蓮浮葉 五十七
紫草 六十
忘草
夏菊
石竹
蕎麦花
苦菜
紫胡
南天花 六十六
合歡花
花旦見
蓮 五十八
苦花
萱草
紫陽花
射的草
芍薬
十薬花
素実
栗花
梯花 六十七
芙蓉州
藻花
百合 六十一
下毛花
羅麦 六十三
馬歯莧
蕘
一ツ葉
藻実
槿花
花柘榴
蓮卷葉
萍 五十九
紅藍花 六十二
金銀花
常夏 六十四
酸漿草 六十五
的計草
霞魚子
素梅
牡丹花
花橘

樗 六十八
今年竹 七十
天瓜花
田植唄 七十三
採物草
牧遠火
蓮
粉川 八十九
鴨子 九十二
夏廉 九十三
心梔子
竹皮散
早松茸
素田
牧 七十五
牧麦草 八十
夏牧
蒲鉾 八十五
粉縄 九十一
輕鳧子
照射
夏木立
瓜花
早苗
田草取 七十四
牧 七十七
螢 八十一
柳子
水多草 八十六
翡翠
廉瓶角
火串
若狭 六十九
胡瓜 七十一
田植 七十二
子乙女
牧植 七十九
腐麦紀蕘 八十四
蝶虎
水鶏 八十七
羽抜多
廉子
于鮫

小絲
五月雲
五月雨
夏衣百
紙帳 百六
蕎麦 百八
六月 百九
水餅
坐隅納涼
古用
海老蒸 九十四
五月雨 九十五
五月晴
夏衣百
帷子 百七
晒布
水宮
一夜酒
富士詣
出于
五月雲
梅雨
虎ノ雨
夏月 百三
世ノ花
水瓶
紙園会
鞍馬竹伐
夏日 百十二
五月霞
梅雨晴 九十八
短夜 九十九
扇帳 百五
夏服
夏衣 百十
素麺 百十一
出ノ文生
暑 百十三
炎天 百十四
夏露
扇 百十八
撫子
行水
納涼 百廿五
晒井 百廿九
冷瓜
水飯
秀霞教
揚梅
日盛
昼寝
風扇 百十九
日傘
抱蕊
風蓮 百廿七
麻地酒 百三十
道明寺
冷麦 百廿一
蔬植
李
夕立 百十五
雨乞
汗 百二十
簟
筋枕
打水
心太
冷汁
于飯
漆取
林檎
夕雨 百十六
雲峰 百十七
汗拭
竹婦人 百廿二
涼 百廿二
清水 百廿八
菖水
水粉
梅干
枇杷
百日紅

蕎抑
河骨
蘭花
勞春羅
玉菊
紫蘇
藍川 百卅五
敷子花 百卅六
新麦
甜瓜
夏生
夏抑 百卅二
菱花
夏菜 百卅三
釣鐘草
鴨長草 百卅四
青鬼灯
綿花
久顔 百卅七
小麦芒
南瓜
雲
凌霄花
蓴菜
青花
弩草
蓮花
赤菜
蕷花
百卅九
瓜
百卅
怪 百四十一
葱姑
海松
恐毛
風蘭
射干
麻
交藺
紅夏
淺瓜
鶏
物
紙魚
小鮒
柴
川社 百卅四
交瘦
交川 百卅六
鮫交 百卅七
毛生
川特
沖鮒
帝鯛
生蘇
交牛
狐
交雑
金亀 百卅二
鮒
海月
夏神乐 百卅三
日折使
芽藺
秋代
交雲 百卅五
交山
交海
交水
鮫交立秋

俳諧發句題叢夏上

四月

橘五太郎輔

[illegible]れてあり[illegible]四月哉　曉蕚
胡麻[illegible]て牛[illegible]なる宮哉　重厚
雪の後[illegible]と[illegible]四月哉　五岳
つゝ[illegible]と[illegible]四月哉　卧央
雪の[illegible]四月哉　斗入
[illegible]の[illegible]四月哉　昭九
雪の[illegible]四月哉　珙六
雪に[illegible]小[illegible]四月哉　存亜
牛多く吼る四月哉　平角

卯中吳てしの机るに力和
查ひつ拾て机のに力和
はつ〳〵と小川をするに力和
撫人し学はの〳〵に力和
ふれ〳〵と地にたるに力和
しまえの寺とに力和
枕うれ拾に力和
はるのほの〳〵ふるに力和
木のうれけしふるに力和
白波てひうれるに力和
なるうれ仲に力和

岳鶴
菱亭
菊也
雪笠
漫て
雑咏
我サ
公路
保祥
春言
有筆

卯力

文元

名ふるしにふるよりかれその白
梅樫のなのやるのかれ
卯力なるふるれし名るに
卯力生や乾村るふ子の茉
除蛙るかりれるる花白し
雪をあるとにおく卯力和
られ〳〵這るとるる元
はを討れ支婦うしを元久
疲腸の毛に激風ふり元久
持ひう知かけにし元久
寄をしむんのれれ元久

足直
蓋之
冥て
疲れ
也高
梅岸
宗瑞
美村
公
疲た
樗元

文元や雪ハ降ぬ雪ハ白し　合
大名れ三人たてゝ文元　百明
文元り六ハ月あ丶ぬ大刀佩ん　曉基
酒呑の瘉屋ゑ也ね元　合
久ゝ丶や狗ゑ有さん文元　白雄
病人のゝ丶やゝ良やれ　几董
文元恊の木ゑ有ゝ　淡路
生ゑを家毎に拭て文れ　白圓
りの元ハ洗ふものゝ元　井入
風されハ雲ハ来たり文元　文明
ひ星やゝさんちれハれ　吉川

文元給ゝと母に笑ひ
ゝゝゝハ又の元の笑ゑ文元
先やれハ給ふもゝ文元
れ久松ハ星のつゝたり
大ゝゝハゝに流ゝり元
り春ゝて松ハれ元
ゝの元を片ゝ文元
文元夫ハゝつけてゝたり
ゝていに人ハ有ゝ文元
柚の升にゝ任ゝ文元
煙ゝと碧ゝけやゝ元

松兄　合
士劫　百明
桂又　曉基
井六　合
陳六　白雄
肩ゝ　几董
成夏　淡路
合　白圓
洗ゝ　井入
丁記定　文明
合

大阜　吾石
乙二　菱亭
合　岳輪　等笠
道光　一茶
力屋　菊也
蔡比　三世人
祥禾　似藻
垂淀　世作
魯源　春耕
雪旭　左文
代法　有君

弥授

袷

聖人吟賞一章九首　文　花　里斐　左手

文　花折りし八生る多ハうゑし　路丈

文　花ゑ風流幸ゑ子のとうる　折は　実川

ふれうゑハ月れゑれん文　花　下弦　成星

弥やゑ子しゆて哲ゑの作き　子代

弥めゑ〜ゑて江り二日ゑ　白梅

弥めゑ子れてこそゑ春の宿　袖月

弥やゑ春の月ゑ業ゑ筏の陰　幽哺

月ゑ緑を叩てゑたゑ袷ゑ　鶯酔

ゑゑ人ゑゑと例て袖ゑ　几董

ゑの脊にゑ〜ゑゑゑ袖ゑ　今

小襖より計指り出て袖ゑ　今

袖ゑて弱ゑ流れんゑ　白梅

誉ゑ指併ゑゑゑ袖ゑ風　栗兆

袖ゑて月ゑ酒の月ゑ　麻呂

初袖ゑゑゑゑゑ　毛

袖ゑて仏ゑ子のゑゑ　上弦　女　秀世

笠のゑゑゑゑゑ袖ゑ　祥禾

袖ゑゑゑを面代ゑゑ　一草

袖ゑゑゑゑゑゑ塚ゑ安宅丸　道義

袖ゑて先ゑゑ塚ゑ安宅丸　今

袖袖袖ゑん　堀川

渋妻に墨引れたる氷かな　平角
氷室て又入道に似やをし　苌高
恋のさそれ良ある氷かな　冥乙
道芝のちれさる茎も氷時　武蔵 几白
氷室て木陰ろふまて元かな　雁风
山を出て見れはまつり氷かな　文角
初氷作りは菓子とぬれにけり　河内 遠宇
氷室守を藩の子はふたけり　非古
あちらうるさくちとえても初氷　浪花 古逸
氷室てやつれしうる氷子かな　江戸 久蔵
氷室て仏沸しき夕かな　下総 香风

白雨
夏衣
単物
青簾

白雨晴れ終手の出かん　蒐苍
白雨や夜来はなりとなかり　芦涯
白雨や一雨くれあやかれ　江戸 瀬花
萬也人の夜衣のところやうれし　英鳴
着の脈をまねうりり夜衣　丿旦
きや巨れの数は色や単衣の　三味人
薄着や酒でしめさる青簾　白樽
素衣もおりてからふそて青簾　仝
庭先を見のはしめや青簾　蒐苍
常にまけいやうなかな青まれ　恒丸
荻枝て夕暮やうれ青すれ　仝

十日立て十日ふるれわき麦
麦ふきたつの川すゑや麦
ふれなやや死ハ麦ゐ麦
きて麦踏ふ人も悔うふ
為悔ふ麦ゐ悔ふ麦きて麦
吉麦ふれ拔もふるらて
ふ麦ふ踏てふふ麦きされ
常ふ入おきやしき麦
麦ふためふ麦ふるふき麦
新法師のふ麦ふつふ渦麦
麦ゐ麦ふの渦ふ麦

芭蕉

吉川
道麦
一茶
淑方
榊翠
東迪
東尺
其角
貫
ふ逸
祐男
常陸
知廣

○六

麦広祭

小白ふや麦広ふ渦の麦
古渦ふきふて安きふ弘
長外ふ世ふ麦の麦弘
ふふふの麦ふ麦弘
沖風を拔ふ麦ふ麦
拔ふ麦ふ麦ふ麦ふ麦
りやふ麦ふふふ動く
拾ふふて麦ふ麦の麦
ふふふて川麦の流ふ麦
麦麦麦ふふふる麦ふ
人ふ麦麦麦麦ふ麦ふ

上巻

麦泉
護物
樗堂
梵其
麦太
宗淑
保吉
岱青
魯源
玄雄
宗淑

千園子　佐々木氏子園子

灌佛　法仏や二本の指八十年の
春陽子仏に法る旭永
法仏やなつかしき八重桜の枝法
ちる花の中に生る仏永
色のあるとくるわるや仏生会
法仏やつを出れば色の木原
法仏のむだやはなと法すれや
筆と一度に咲たつ仏永
天竺の甘だれの春陽永
肌脱て著さるる世や仏生会

詠吟　無酔
閑夏　夏たち
去来　白桃
公　春亜
松兄　完来
成安

うぶ人しいさをまへ仏生会　道光
法仏や天の生るる日あれば　蕉白
ふくて仏の生れるたうり　田人
松風のこの子吹や仏生会　紀伊　仏芋
法仏やせの白家を足と中　女来
法仏やなつかし一日ん咲そめ　土佐　瀬江
木を去りして生れる仏永　遠江　鈴石
法仏や常盤木にはる花の月　一水
仏ろや子に摘花の枝を出る　天外
花序堂　君の代や四百八十花法会　鳥酔
花法会酒達をしあるかな年　夏た

花先雲夷傳のたしなんしたる
北堂のよへるんして示性雲
そこをれりしこを渡め示性雲
挑たちやねうんすしし示性雲
ゑれ雲ゑゑれ雲ゑれぬ竿みてしゑ
ハり花今陸ゑてしゑれゑ
文に籤ゑるんハ蓋ゑんゑ
文籤の人に言うきの数ゑ
文籤や忘て蝶に怒ゑ
けうりや東ハにるしの示ん
文籤や人の異たる数の示

晩蓋　白牧
百時　乙二
古時　一策
挟雲　護物
金陵　孝村
芦庵　合
白牧　凡亭
芦庵　大江丸
白牧　祐男
乙二　乙二
至去　去高

竿鄭蝶

夏籤

文花

陸ゑゑ書にすむる文示ゑ
ゑ二角文示ゑゑ田引と
夕法や旬の小紙の文花持
籤の紙ゑゑかゑる文示ゑゑ
文百の雲ゑゑゑゑゑゑ
りを文ゑゑゑゑゑる家の文去ゑ
去の文ゑゑ示に雲ゑく文去ゑ
ゑゑゑゑゑゑる文去ゑ
花ゑゑゑゑる文去の机ゑゑ
文去ゑゑ法ゑゑ琴の素ゑ
うゑ人の文去ゑゑ心祝ゑ

文書

和泉にてきけられたる文去れ
笠の戸や一文の草の枕　雲
夏　影　　雲平　梅此
文行　　重厚
麦酒　　麦古
古茶　　久風
風炉　　田扎
　　東卿
　　百川
　　丈古
　　梅居

鉢

笠うしにきてやうり白ゆ　白梅
はるれさし家と旦の鉢の壓　貞佐
凄うあれ石の枕や一本鉢　宗瑞
いとけなきをいたうん鉢の皮　麦太
麦に家を立てもし鉢一本　公
鉢ひて徒行とし心うき身れ　保吉
涙世鉢語れいもし去徒に　沙羅
鉢うれよ松をきそへてるうち　乙二
皮鉢や母の皺なの立ちれ　篤老
仏のりきを鉢麦のくるけそ　尼素月
ふ心のひまろりとあるを鉢の背　美九

松魚

弥太郎ついで先や河の青
活て来る子の代よりし初鰹　丹波　素涯
松の月ゆ[illegible]人よ初松魚　手酢
地を走るあしよそ風し鰹売　晩蕉
夜あらし伝ふし初松魚　今
面白の書うら方や初松魚　白雄
えて[illegible]飯に配られ初鰹　蕪村
月今や松魚の膳炎後の節　百明
をしまや活美のそく初松魚　保吉
初松魚下り役者の足取哉　以言
[illegible]の下をはしる不初松魚　旭丸

麦秋

その戸や人の恵みの初松魚　樗堂
うけをの周れ[illegible]松魚ゆ　五梅
[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ初鰹　一茶
松瓜さ人苗てうらを初松魚　道彦
初松魚[illegible]の[illegible]　志郷
[illegible]方の松[illegible]鰹も月夜ゆ　一茶
鰹ハ友の花うり初松魚　雪笠
[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ初松魚　旦く
松[illegible]の[illegible]ゆ[illegible]初松魚　三徳人
貝甲ハ成し松魚ハたくし　同く
麦うちや[illegible]麦[illegible]く等の先　樗堂

[illegible]や麦の穂　[illegible]
病人の[illegible]も[illegible]麦の穂　公
[illegible]しきるや麦[illegible]秋の[illegible]　[illegible]
[illegible]人世[illegible]て[illegible]　公
[illegible]の[illegible]中[illegible]麦の穂　[illegible]
麦穂や赤[illegible]　[illegible]
麦穂や埃の中[illegible]　[illegible]
麦[illegible]の[illegible]　公
[illegible]の[illegible]や[illegible]　浙江
麦穂や掃[illegible]人[illegible]　[illegible]
田を[illegible]て[illegible]麦刈[illegible]　[illegible]

穂麦

青嵐

麦の穂[illegible]　白居
麦穂や[illegible]　岳翁
掃れ[illegible]や[illegible]麦の穂　木海
[illegible]麦の穂　二川
[illegible]麦や麦の秋　[illegible]
麦秋をそつ[illegible]や[illegible]麦　[illegible]
麦の穂を[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]れい穂麦　[illegible]
[illegible]や[illegible]　[illegible]
[illegible]拾[illegible]麦[illegible]　白[illegible]
[illegible]麦の[illegible]　公

青嵐淋ハたゞ旅に旅する哉　保吉

弓持の笠にさはるや青あらし　百昨

麦刈のあとへ行ぬ青嵐　房　麦二

世にゐれてかては舟ゆく青嵐　士朗

砂村や青い東風ふく笠の人　恒丸

同の昔の笠は昔の毛青嵐　李大

立さわぐねみ花の青あらし　大阜

池の汀る蘇のしげりや青嵐　道彦

青嵐ふく十小勝の葉くれそ　仝

筋違に小村をわたり青嵐　其堂

関ちの通れといふて青あらし　江戸　寿羅

牡丹

青嵐起出て見れハ芙蓉かし　佐渡　路人

青嵐簾の江出に蘇かれ　江戸女　琴泉

坊壺に吹よふりかわり青嵐　浪花　嵐谷

花もえて月を抱たり白牡丹　暁台

百南のちさき寺嵐る牡丹かな　几董

筆とるき夜を静る牡丹かな　白雄

牡丹切て気の衰へし夕かな　蕪村

ちりて後俤に立ぼたん哉　仝

白雲のたゆたふさきて牡丹かな　黄之

さげて高欄に牡丹かな　仝

かれ本の花咲てぼたんかな　大江丸

以敢に人さらぬ牡丹れ
多深ぶさて牡丹れ八重葉
ほりれてゝゝ庭の牡丹れ
叶人をきゝ数ちる牡丹
ゝゝと牡丹つゝむ塀の内
雪の数ゝ咲ゝ咲れ
咲れんをして白き牡丹れ
いちの葉ゝもの〻〻牡丹れ
牡丹ねんたれすゝりゝ
咲出てゝのゝきる牡丹れ
白牡丹ちる叶ぶれゝりゝ

公
松兄
希言
祐号
士訪
遅力
木僊
葉兆
戸菟文
成英
一醒

牡丹れ
君園に入てしけき牡丹れ
ゝゝれそれ家ゝし白牡丹
数凡ちる牡丹も花ゝ白
花壇を咲んゝたゝれ
ゝさりゝ友に咲つゝ牡丹れ
その家咲ゝし特牡丹ゝ
花ハその咲ゝたゝゝれ牡丹れ
ハ者ゝ小ゝゝ花の牡丹れ
花ゝつゝそゝれ牡丹れ
花ゝ花ゝ牡丹れ

芳之
芳成
公
佐嶺
居誘
一華
乙二
月居
岳路
天夫
月化

横町の地蔵堂にて牡丹を
たづねんとて花ぬ牡丹のたて常
陸山のたしなきまぬ牡丹を
一株の牡丹殆り黄にそり
くつくつも又毎日のたうれを
出つくをしんにあつけて牡丹を
見る人夜の明るし牡丹を
ながめて居るを出つくしたる牡丹
牡丹をくをてその茎をとるく
る枝を押つけて咲たるれを
黄にそる白牡丹の二茎を

其堂
養叟
李園
蕉白
雪堂
養亭
学笠
雪高
美洲
菊也
康人

○十四

白牡丹咲て十日をすぎた日
町人の孫うめりたるれを
牡丹をうくるとしいくもひの夏
ちる花のそしふたる牡丹を
白牡丹風を抱て寄たるそり
乾かたけそれ牡丹にたるし
碎きれて塵のそんる牡丹を
ちるつれ絵つけるる牡丹を
来やのうより白き牡丹を
牡丹咲て傍に石を起しそり
見とりやの白き牡丹の素行を

女志宇
秋文
卓池
乗紀
硯布
玉鉾
居然
尾張
五老
雪頂
松呂
東庵
丙子

たのもれてもてはやされし牡丹哉　行俊
蝶もとまるの枝ぶり牡丹畑　尾張女三条
ぞめきをしけるとしに牡丹咲　駿河亀年
牡丹咲と見て立ちまよふの元　光俊
白牡丹猫の眼の閉じ方　桃序
猫もして碁にもれたる牡丹哉　伊勢
白のみを大きに咲く牡丹哉　汝南
花といへば牡丹ばかりなる人　安養
いろにて牡丹もそたたぬはなし　義俊
芍薬に世の秋ばかりうつり　塚行
芍薬に洞戸つる庭の　左京
　　宮父　　何時　　白桃

芍薬

又六代芍薬つる山あれ　士朝
芍薬や幾に弱るうつ家　道光
芍薬にたのしうつる蔭の　支槃
芍薬やくくはまの小さうち　学笠
芍薬やあるべき所ぞ　尾張　雪史
芍薬はいられる玉も咲たる　下総　尚白
ちとるくくはゆ珍あり牡丹　柳居
ちりそしや遠くて牡丹　晩蕉
くくの扇ぞさらしぞつる　蕉左
牡丹持をさいて咲まつり　仝
仮初に見てもとしし牡丹　樗良

白に人立もとゝのふやそなつけるる
宗匠に文にさるもつ杜若
をしをのをしのふや杜若
杜若形と形ふ花まし
あ寸一本答ふらしそなつける
杜若やさしむ花のりぶきれ
鈴風やたゝ今咲し杜若
杜若長ゝやまや田一枚
りをゝにいつをゝ杜若
杜若夜まるもいうりゝ
杜若白ぶたて世をも侘るまも

白樓
保吉
考麗
希言
蹊道
春亜
昭九
寒崖
成美
蓉笙
之顧

鈴の音ハ弥も腥し　杜若
垣ふ元を人ふるゝ杜若
人ゝのうつゝねハうし杜若
ゑに形ていよ〳〵枯れし杜若
学のを言のうけてゝるる
ゝゝや又も伝ける杜若
姫夜の花ハ咲ゝり杜若
投入て ゝゝを元や杜若
人について夫ゝけゆけハ杜若
杜若茶てハ人ハ来ゝり
生ハ白にてゝゝるゝの杜若

甘谷
可都里
一茶
道堯
仝
菱亭
養孔
魯隠
宝梼
梼閑
長高

杜若　宮松
大屋の時雨やしをれ咲やしる　申高
あけぼのやまだと開く杜若　万和
たちわかし二人ハ佛杜若　菊也
まちて也不比の杜若　武陵
あに来て小白川や杜若　如志宇
杜若酒呑比の蔦　護物
遠ゐ花今さく宮ゐたる　ゐ影
杜若ひ行粉ふれさしし　頑布
杜若白ゐ山ゐ旦ゐ　亜渡
さう者明れえ杜若　尾陽　扶摩

燒しまれひまそ杜若　漫て
そ夜の秋くうう杜若　越雪
雪明ゐ夜し女花り杜若　尼来月
秋のうち人ハ来ぬ杜若　都賀
四神の岩へやまよゐ杜若　小尼
ゐの数の花れ杜若　ヒ芝ひ
杜若同りまひん秋　朝ハ雲翼
盃のちまゐろや杜若　岩根可来
月のゆゐ宮ゐ杜若　丹波野揚
秋やれるを奪ハや杜若　ヒ戸玉光
樹のまに撥つるや杜若　ハ琴雪

[illegible]のつよい故のけれり　杜若　甲斐　文馬

遠ふる花たちうんと生ふる　二ツ　信濃　栄如

まに〳〵　櫻花たちうつる　下総　蓮吾

赤ちゃん流れ　君ゝ代の紅に　杜若　大和　杜口

りにつれて咲　杜若　肥後　起氣人

ふを折り　教の白たち　菖蒲　国更

留主の戸やり　教やうと　菖蒲　保吉

と紅ふれ八月八合ゝり　花菖蒲　戸　柳人

ゝぶるゝ赤ゝ良ゝ　花菖蒲　長　月化

当のゝ菖蒲　長　東路

玉井芍薬　菖蒲　晩甚

玉井芍薬　紙屑傘

櫻　栗

井義への元ことむ文の花菖蒲

いちゝゝ千花の面りを活ゝろ　雪笠

孝庭やんゝ　ゝゝゝき紅の白　吉川

玄蔵に刑れ　ゝゝ　荒来

ゝゝゝ　麻ゝ　連清

地蔵の焼打　の答ゝれ　国更

白芥子に陳　ゝ　公

見物をゝゝ　ゝゝの咲ゝ　菊吉

物をゝゝ　芥子花一本　公

芥子れ　ゝゝ　晩甚

芥子の花ゝ　ゝゝ　白旋

芥子人ゝ　ゝ　菖村

傑吉
塚美
大江尤
仝
盛吉
常言
有筆
柾尤
士朝
仝
丈助

長山
長翠
吉蘭
樗雲
業兆
成英
仝
白麻
兄直
完秋
可教

くさ咲やそのいたりきたりの家
酒のしたれかふれやそのふ　合
くさ咲てちくさかくれの花　百蔭
押ふたきれやくさの蔭　乙二
咲ぬふのてはくさ　尺笑
花根ふれえ四ふれで蔭ふ　百尭
演風のくさにあれこむ蔭　合
村白やくさのたりより涼ぬ
くさ咲て小ちくえれぬ蔭　一茶
ふくさの花のおたるくさ　合
花くさくふくれ人蔭の白　月化
　　塊蔭

ふくさにさるハうくさ麦の凝　色格
風月れ出ないくさくさのふ　合
百はるやくれ見つくさのくる　蓑比
四書ふたれくれくの咲ぬくう　一茶
ふくさのさはくふくふる風拾ち　长白
出月れ見ぬの月くさのふ　寛松
松ふけやくさの蔭のうさき年　寿閑
蔭方やくの心はくれくさのふ　椿雲
とう切てくうりて青くさのふ　雲梅
塚のれにちくうくうくさの花　女河
ふれ出ふ月れやくさ　畑　蔭白

何花もちるを待かちるしの花　菊也
義を立て枝にしの不こゝ和　淳人
笑ひるし　や藤首猶古そ　逢夢
鈴や花立中のそし　柳　山口
そしの花事れてたゝ鈴　文常
白そしに花を霞のそよ和　其成
花そしや打へ人をの盤の虹　東卿
白そしに眠をすしそり虹是　谷卧
猶の灯についてさそやそしの不　砂量
主房の花もそそ花やそしの不　養喙
松風さそ〳〵付やそしの花　李尺
　　常盛　　祇雪

苣の花　京
蠶豆花　漢子
豆の花　蟬夢
風車　雪笠
石蕗　越中
英花　巴文
　　越中
　　一庸
　　芝村
　　公
　　保吉
　　養虹
　　力化

夏草は仕隠すとて夏の花
卯の花に中ふたつけし荊の忌
うつろふ花は八重もすれ花菖
蒲唯美人の髪中やすれて結ひつる花の忌
菖蒲つれ垣ゆ結ひつる花の忌
塚くも美人笑も美人の
花くもうつろふ美人の
卯の花は中ゆ菖蒲の
卯の花や笹を結ひ垣の
卯の花や形代の夏の

五月雨
岳格
雪笠
守之
對亡
ロア
菖蒲
其清
丁度
雨考
晩菖
包種
合

卯の花の笹ハ去年ハ
卯の花に小家
卯の花も去て垣ゆ男
時鳥て卯の花つゝむ歌
卯の花を形代
卯の花の中ゆ歌の人
いなさうき卯の花垣の
卯の花の卯流たつて帆を
卯の花や櫂ゆ
卯の花や文
卯の花の咲る

存亜
垣九
士朗
櫂雲
菖兆
成夫
笠素
鉾木
可教里
合
一子

麦ふみし人はなれ花咲けり
屋ふきてなれの花咲かぬ田一枚　乙二
雨明て来てなれの花ちりぬ　左光
なれの花のあり分れしかな　公
なれの花や何の月切と言せ　養孔
花の反和一の花ふきこぼす　一茶
なれの花の残りぬ花ちりぬ　魯隠
なれの花に雲引かてちとり　梅翁
おりて入て年ゆくなれの花ぬ　亜浪
なれの花をよごしぬ雨の後つり　漫々
ひかりのなれ花ぬ　東野
なれ花に雲ぬ　蕉

○廿三

なれ花にうもれ出しぬ　川二
なれ花や周りの月ぬ　一夕
なれ花やとうこたりぬ　其枕
なれ花や竈の火ぬ　葉居
なれ花に明る雨　岡
なれ花にる良のうせし　崔
その名の知てうれ花てしぬ　左節
垣のにはなれ花てしぬ　百川
知くのおてしぬ　保古
おそうよりおの一ゆしぬ　有亭
多美なれ　長翠
おううううう　蕉　苔二

郁花腐

芋　楓

[illegible] 桃 [illegible] 青牛
[illegible] 桃 [illegible] 養氣
[illegible] 桃 [illegible] 牛求
[illegible] 桃 [illegible] 麦菊
[illegible] 桃 [illegible] 麦琉
[illegible] 桃 [illegible] 湖中
[illegible] 桃 [illegible] 仙丹
[illegible] 桃 [illegible] 桃文
[illegible] 桃 [illegible] 春雄
[illegible] 桃 [illegible] 閑更

[illegible] 自の[illegible]
[illegible] 村
[illegible] 白
[illegible] 白
[illegible] 百
[illegible] 保
[illegible] 書
[illegible] 牛入

存亜
布言
胆九
士劫
公
鉄道
八風
桂氏
業兆
撐雲
長亡

百雲
成矣
百毒
茅屋
心非
乙二
公
雪笠
長為
号老
堊箱

一茶　爽松
雪橋　笹庵
草池　秋拳
漫々　星湖
縄啄　成瑳
豪心

女　虎藥　荒法　其成
吾雀　作法　乙雲
陸奥　一柳　伊勢　巨例
斗入　似藥　出羽　洪水
作法　李友　孔樂

地蔵堂の門人たちの句
戸明れば白の法衣の夏の月
猫の目も星に光る夏の夜
ちらちらと行くは夏の夜
松蔭の流れもさらに涼
やれたもの有れば夏の夜
咲つゞく夏の夜
枝の夏の夜や鬼も座敷
夏の夜
夏の夜の花の面影
書　夏
夏祝ひ月の人うつる夏の夜
菓を喪て世の中の義理

葉櫻

葉櫻やまち打たるうり
葉櫻に風のつゝみを忘るゝ
葉櫻や世にふる人の出あるる
葉櫻や見むもやるる人に
葉櫻の大雲寺や池の上
葉櫻や牛のふたゝ片山家
葉にうれいたゝ色の櫻哉
葉櫻の気ハ手に弱れり
葉櫻とつゝ法を櫻の上とり
来てられハ夕の櫻葉れ
葉櫻や果ハ物の資也

○廿七

曉甚　一雲
ゝ戸　乃光
董雲
子影
天保　麹平
柳翠
ゝ戸　栄静
一蓑
蓑村
文政　一路

実櫻

木華歳

櫻の実小町ゝ実のはゝ
ゝゝいつやゝ人も来ゐ
ゝゝ山ゝ来ゐ
木も蔓にうて蔓不蔓の穴
湯泉泉ゝ到て蔓ゝ
下言や櫻の実ゝ
鵬のゝゝれぬゝ木下言
下言に壬生ゝ小猿ゝ解
ゝれゝゝゝゝ人ゝ木下言
下言や物のゝゝ小生
何世の埼ゝゝ木下言

物は　菊房
蓮蔓
文政　星布
道光
星鹿
白雄
祐号
一醒
坊門
乃光
公

宗盤木庭茶

胡麻はきぬぎぬや木下蔭　宋　貧僕

碑を杖ていろふや木下蔭　下品　牛圃

青盤木の花茶にふるつて靜也　青之　乃堯

梅ちるや七夕の出物ゆき　乙二

ふけ木の大こんの花茶に　陸奥　李光

松ちるや大根にうつる底机の上　安房　斎人

美男美し松の花茶の後の上　安藝　巡史

乃井へ亀遠出て松ちる　護物

外房茶　ねふるさん出て掃井の花茶に　晩甚

桐の花　もに茶に桐拾して花ちる　保吉

人やそ十とせ余りや桐の花

柚の花

ぬりこん出の玉の井うゝへ桐の花　会

花咲ぬ七度切し桐の木に　路人

主の洗し裏に花ちり桐の花　越後　松魚

花と枝ハ黄ばたる花柚の　夏花

先小桐参てその花柚の　会

花柚ちんてうくて屋の蓋の　白桃

狭ちう逆茶を住る花柚の　午心

柚の花を尾目に来ちりゆ賞　上総　白老

柚の花れ乾く雨にたれちり　陸奥　吏仙

柚の花やたう咲て雨の中　北岱

柚の花の茶すもなむう新の素　女き

まさこ椒　白い花　加賀　正雪
扶桑花　朴の葉の下　傳笑　志順
柿花　柿の花　白尸　段二
何事の教にかはらぬ柿の花　来嬌
柔延に咲くしのたり柿の花　樗堂
柿の花の実をつくる柿の花　李剛
涼柿のもぶ〳〵ふと咲たり　一茶
柿のふるとも咲とかれけり　漫々
涼柿やあれすさまれの花ふる咲　武秀　可布
麦畑のあらに白く柿の花　左節
小てりや垣の内うらへうて咲　出羽　壺中

○廿九

白丁花　さくらの花や白角に白丁花　尾張
むらの花ほうらく成し白丁花　武秀
義桂　世の中にさくらの義の桂哉　一玲
橘桐花　あらたまる樓桐や白月の花　班象
去ぬる花をさくられて花心　馬逸
不逸の花咲ちへしゆるの花　五明
あすもさん初花ふる茶花　雪笠
花茶子　花茶ふられらも羽之のひつれ　美九
初茶子　うるさいち茶の実の初茶子　乃竟
京へ出て拝にうれ初茶子　無絡
初茶子搗れまさに色うすう　貞佐
吐月
寿々

糸子

筍

一草
合
護物
岱書
又曰
長翠
成矣
書牛
岳村
藝之
陵基

保吉
重厚
又曰
在亜
寸来
士訓
合
桂又
姫九
沙羅
成矣

竹のあやをよりあはせて張りしき
あんだりて秀しわれや竹の新
竹のあや牡丹のもの秀うし
竹のあれせにすむ人うりを友
竹のあれたるにわ白の苔
筆によりしつれし竹の白
筆に病のうたうりうり
筆のうちハたく春にのれうり
筆のたけ拾ひて置けり
筆やはくらわ手の先すくも
筆のえねりに味ひ有るぬ

素藻　乃光　養孔　桂堂　著之　宅桂　一茶　亜渓　其堂　井肩　東之

甲斐

篠

子

心法のたかハ竹なるハ子うれ
筆やふるくこのハ子みの夏
ちれとふ筆にたうり
筆やり月夏乱れて笠れし
筆ちやて枝端れ支にうれ
枕の月筍ふれし孫ぶれ
筆にまてき話をやく嘗わ
筆やけしあてつる家の五
筆や笠拾たをてやそつ
筆や義生ふこのをいつ乱やる
篠のあれ安ふるるり教わ

下総　研石　女　應て

尾張　紙屋　鳴鶴

江戸　泰人　信濃　天る

越前　旭丈

越後　蘇風　長枝

雄英　色言

露

奥

郭公

みの花のこゝろ〳〵藤の庵哉　愚軒

藤の花ハ底にのこれて哀の白　芭蕉

しのゝめやそこらこゝろに藤の白　乙州

漏新の白もゆ焼し藤の雫　公

小竹て竹ゆ〳〵ゆ藤の雫　素迪

鶯の鳴をとゝり庵の藤　其白

藤

荒てゝ一搦かゝる藤哉

き咲き雀の藤ゝ藤の白　古節

鶏壺へ柴刈入れ藤ゝ　悠心

竹の子に下枝つゝ風置藤　樗良

ゝ雪のゝ藤のふる郭公　也有

郭公

郭公の初ねそ恨なる　芭蕉

ゆ祝ひ九りゝ長ゝ　公

ゆれゆゝそ夕のゝうれ時ゝ　閑更

郭公なれ山ゝ老ゝ　公

郭公や花ちるゝ杜宇　白雄

ゝりハ月ゝ杜鵑　公

起郭のゝの長ゝ郭公　晩芝

ゝ時ゝ陶屋ハ郭公　公

用意師ゝ行れ郭公　公

郭ゝ屋ゝ行れ郭公の雫　芭村

郭公長良の祝

付うゑき歌のうしおれ
る歌 孫遠八九の色含れる
郭公雅義の形うつり
る歌 新してうれ人えれし
故にくれ槐にきられ物うき
杜宇おうれ甲斐なれ風をき
鶯 ちうつ をるうり 新 公
似るものもうき晩やはきれ
号 亀泉にあらあ日おい
四 梯もも海のうちを歌
恋 出て夫をうれうり 新 公

九 童
公
公
撰 美
義 晨流
生 蕣
保 岩
尼 諸九
不 的
公
代 吉

新 公 の うくうり や あ る
る 歌 ら れ に 長 る に り ま
ち る 花 の 定 に 忘 れ て る 歌
む 越 し そ ま 四 に 低 し 新 公
大 る ハ 寄 つ の 花 を 新 公
新 公 時 木 と あ ら ん れ 梅 九
る れ 長 れ あ る ま れ る 歌
杜 宇 う れ あ う れ 光 に う り
笠 人 を 安 ハ 遠 れ 長 ま れ
白 風 の 人 に 安 ま を 郭 公
る 歌 う り 杭 の 第 を 白 ム

公 鉄 新
斗 入
公
結 石
公
吉 物
梅 人
春 亜
公
大 江 九

よりてそ思ひにえれる新し
春うへに咲き出るあやめ
あやめ咲ていやゝ[illegible]れる祝
名所の春さめうるわたる祝
半ゝ[illegible]梅の花不部
世の中にたゝねうる祝
山々の春はゝ[illegible]
る祝うゝやゝ[illegible]
夏山やゝ[illegible]
夜八分のいゝつゝ[illegible]
る祝おのれ[illegible]

○四

合
莫二
姫九
合
祇号
松兄
希言
合
自樂
尾城
士訪

[illegible]
村白ハ[illegible]
杜宇咲や篠つゝ[illegible]
月八ついてゝ[illegible]
る祝咲や[illegible]
時々咲きやゝ[illegible]
何やまてゝ[illegible]
月れる面の[illegible]
先われハ初[illegible]
問題[illegible]
同祝に春さや二月のる祝

合
合
遲月
祇六
七翠
合
樓堂
合
外六
丈方

子規鳴やうき世の山の中　古琴
子規声ありけりきく山の家　木僊
見ぬさきにしてえたぬ先時鳥　道隣
その節を人も覚らん子規　成英
ちらりとみしかまて杜鵑時鳥　仝
木や雲の姿ともなりて子規　仝
短夜ハとても短し郭公　喜年
子規声んや頃ハなかりけり　完来
まことにも鳴日ハなかし子規　仝
松杉も晴しさうな郭公　柳也
痩骨に肉喰んに来ぞ子規　湾水

子規かさねんと恐れけり世　菁之
君か代のやさしさしれや子規　仝
時なれぬ枕なる宿の夕やせん　仝
子規天の川風打とけあり　可都里
鳴ならりりん月ありあかる　仝
筆人をとまり覚しを郭公　仝
まちしあり晩や井の鳴る　菁成
鳴るはれぬ見ゆる也松杉　祥来
実ハ人によるし降るゝきれ　車大
地ふりりて鳴て夏あへ時鳥　鬼子
あかりく蚊れハ月に出るたる　蒼　宗志

花の色は眼に見えず時々
さえずりのみとうくる歌
なる歌は上数年を
小笹せもとの歌
ふるさとに住つゝ鶯と
いさゝかに初まりし歌と
時鳥初まりし歌と
立ち寄り時おくを聞とや歌と
羽ちゝにちりける歌やれを
鶯の一枝の柔は投やすし
なる歌人一時はかろうし

白柳
乙光
仝
仝
乙二
一茶
月花
仝
冥々
大阜
長路

○卅六

九月廿

よろ人の仏はさし歌
初夏の月花に時々
有れ郭言おもしろきなる歌
人丈に子ろし心鶯と
大元に身つゝみてる歌
なる歌なれ元その月夜
時鳥ハ郭橋の詠なる歌
七夕ほと松似ゝてる歌
今屏に夜のうつるやる歌
なるるハのつ引うし鶯と
附る條の五あり夜の京

仝
仝
月化
平角
尾仝
養化
仝
素迪
袁丁
一茶
寄閑

りかくり雲れ及まてる 規　　仝
る規長越の仏とけてくり　　槐蔭
り巻ハくちて徒るそる規　　長高
る規四りれしのくるうる　　素郊
る規市にすしを分と絞し紙　　仝
る規それそと見れいしの滝　　玉屑
白ってい紙れ吟れる規　　梅閑
迄りしあのうちくる規　　椿雲
それれ行ひ絶て名れ鳴　　仝
郭はくてそ手の気出る　　歌尤
現くそりて物名のる規　　蕉白

世て鳴る法ちる黄しる規　　雲槿
吟てりてくそかちる規　　仝
ちる手のと打ひくめる紙　　雪笠
鳴へゆく癖ち外り紙　　仝
ちくくの夜そ長気る規　　養亭
形より地ちり考て郭　　仝
法おうる人すれしる規　　寛松
木の年とるそ吟ぬ鳴　　垂陵
俳白ハ人のため郭　　仝
手ちれと業をちり時る　　鈴月
付る見ちり考ちりれ中　　少如

吟時を打のゝ森笑うる歌
吟まへとあ書ハもし時分
る歌笑て笑うぶの一事ハ
メ自ハ色をゝ吟のれてる歌
笑を木も眠にるゝむ吟る歌
る歌るゝと打り人ハ友の色
公てだけハ人分ゝ枯れる歌
部ゝ人ハ雪ふむ書ゝう
る歌せハへるゝ枯ゝき
る歌人ハ春そみる書の
きゝやまに月を打ゝる歌

○世八

公 武陵
賀 松花
賀 季有
晨 分
公
賀 馬仏
詠人
護物
女 志半
梅岡

吟の松ゝ見ゆゝ時分
る歌秋ゝも似ゝる書ゝう
時分まの下ゝ出ゝる書の山
撰むゝあまそ物書の歌
萬葉をそたゝりる歌
ゝし特しむる歌山移
朝りの色ハちれゝしる歌
ゝるゝを春の巻下る歌
る歌りゝゝよゝ人の上
葉にまの女ゝ部山東
る歌ゝして始ゝき書ハ

公 井有
其雲
万和
女 きゝ
公
方吟
立志
漫ゝ
居然
扶峯

子規花の中にあり二ツ　作家　麦二
壺の戸をさして出られぬる　〃　垂仙
花のちるに仏ゝをまれる　京　其成
ちるを惜みれをまつる子規
花のたもとに夫ゝの夫ゝや　鶴鳴
ひとしより手のはふてもる　大和　後皆
子規世を花ゝし時ゝ　相翠
子規寺のふるれに月ゝ　文河
子規雲に七十又ゝ　菊也
時ゝ清れ人来し　白考
子規星を猫の声ゝ　浪水　鶴雪

子規沈に月をうつれ　筑波　双葉
子規経く折ゝ小一年　李院
月ゝ子ゝ月ゝ八ゝ子規　不物
子規鳥に月ゝ子ゝ　百非
鳴ゝ子ゝ子ゝ子ゝ　伯風
子規ゝ子ゝ子ゝ　柳園
子規ゝ子ゝ子ゝ樹を　孤山
子規ゝ子ゝ射ゝ　其主
子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ　古芳
時ゝ初ゝ子ゝ　重行
子規二ゝ子ゝ　橋九

常高入

る枕草子に見えたる
る枕草子のとまてをの上
時々筆先のかりなる
る枕草子末末にすりて
時々筆て時々筆を
る枕草子にけてもまのる
紙書て石根の上なる枕
窮を米文も事也時々
時々なし版の業もる枕
る枕草子にうるこ唐うこ
常のまを入て今時筆系

似藤 源氏
源氏物語 桃葉
尼 東方 陶淵明
常陸 紙石
播磨 士川
方舟
尾張 文風
古筆
蘆書二

老常

高を入れし常義の紙表
常の高を入るらと白りて
人の老常手のををぬそを
常を小水の小所も老を時
常ハ人常除も常しき
常ハ合歓の子入て老る
ものよりなれハ常老とし
常の打れしまして老まり
常を老をうつる風をれ
常も老る四面れ相風
除山横老常れ常れり

柳起 播磨 少高
天竺
乙因
下総 士訪
常陸 之顧
丘高
一茶
筑紫 蘆和
双高

門花

藝ゑ[illegible]まてに寄る老ゑ[illegible]り
寄れ老を取て千ゑの実　魚文
寄ハ老ぬつりの[illegible]の雪　惟平
実ゑ[illegible]永ハむ[illegible]れ春にみる　義兵
ゑる咲ぬつしし[illegible]て乃　庵　子酔
ゑれに来てゑりゑ[illegible]ゑ布穀　蓼芙
件ゑし未ゑ[illegible]り実ゑ　蓼古
実ゑ[illegible]成ゑれゑ枝の実　仝
件ゑ[illegible]ハ寄ゑ[illegible]ゑ　冢更
実ゑ[illegible]仁位人ゑ[illegible]ゑる　仝
ゑ[illegible]ゑりゑ[illegible]ゑ　春阿
[illegible]　蹴基

ゑ[illegible]ゑる時不花ゑ[illegible]れ　仝
時ハゑ[illegible]二つの[illegible]の[illegible]ゑる　白梅
白梅を花に時ゑ[illegible]ゑる　仝
新ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ　菱村
実ゑ[illegible]梅の枝ゑ[illegible]ゑ　仝
[illegible]ゑ[illegible]れ[illegible]ゑ[illegible]ゑ　拙不覺
ゑ[illegible]ゑ[illegible]ハ[illegible]　百枝
ゑ[illegible]ゑ仁拙と答ゑり　白林
花ゑの花の[illegible]ゑ[illegible]ゑ　代吉
立てりゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ　仝
ゑ[illegible]時や[illegible]ゑ[illegible]ゑ　保吉

狂歌し吟きし似ハ徒そ久てこゝろ　仝

久てこゝろ姿見ゆれハ狂歌し　不昭

ゑもちあちきくく手久てこゝろ　鉄只

久てこゝろ梅の林を志あそらく　旭丸

ゑふのりも山ハ浅黄に久てこゝろ　斗入

久てこゝろ古松越を落しゑり　柳荘

尾もありてゑるとれ久てこゝろ　春亜

着ゑきさあちもきく久てこゝろ　瑞六

牛る比参中合きゝ久てこゝろ　湖江

久てこゝろ狂歌しきかく久れ　士竹

久てこゝろ着を巻まし子れふの中　仝

あちあハ花妻ありた中久てこゝろ　遅月

樹をたてその浮ハ見そ久てこゝろ　梼雲

月花にさはらぬすの名久てこゝろ　ノ旦

久てこゝろなくやや朝日十五日　葉兆

久てこゝろ楓の花ハ人志うす　成美

久てこゝろなくや小豆の真ろまて　仝

久てこゝろ琵琶ゑのまそおくられ　之顧

久てこゝろ夕暮れ雨をこ尽しり　年心

久てこゝろ花見し人吟ゑ久れ　可起堂

久てこゝろハよあれ中耳につく　仝

久てこゝろ静かる世のこゝろ　蓍成

久てうかゝさむ先へやうやう
久てうたゝもたゞ沈吟まう
夕暮ハ変てうゑ久てうゐ
久てうかゝや路り遥さくら
ぱさくと花ちるつゑ久てう
夕暮ハ蝶も久てうゐ久てう
久てうまてゐ和ゑ花もし
吟ずにさけるまのうし久てう
吹れ来て一りかゝくやう久てう
久てうるうれも浮世を捨ぬ
路ゑ西にさそりゐ久てう

蕎之
猟糸
不寒
花光
仝
月花
素狩
無絵
竜地
雪笠
桂雲

吟ぜて忘れの つゝ久てう
一遍き桃人ゐて久てう
却しよりちれさいとやう久てう
你ゑ路や故人もうる久てう
首筋の毛ゐてる久てう
久てう吟てゐれさ笑へき
吉りの印りりかりも久てう
久てう屋も情つゝ来て
久てう泉の先ちる木の枝に
人〳〵わ花も咲うり久てう
久てう却れ人ハ人ちう孔

袁丁
菱亭
寛松
长為
亜俊
孝閑
一茶
少海
女志宇
卓池
護物

三條の辻に米うりてゐ　柳河　女流
白雲の消ゆるを待ちかねて　秀文
えこそ云ふ氣なりけれ　美芳
月ひとつの盃ぶうしてゐ　柳翠
山人は旅とりこしてゐ　吳服子阿
えこそ呼ぶ任ぶそもうゐ　大和子翠
人ゆかぬ山ゆかぬ　幽嘯
泡山に書二交おそえてゐ　能子　湖柱
えこそうまれのむつに来て　周鶴　村之
えこそ呼の声もかなられ　阿量
年ぶれば呼ぶそもうしえてゐ　扶老

呼ぶまを和へうれえてゐ　何丸
痩ぶて降りうえてゐ　壺半
えこそもぶてすむ小鳥　一美　戸
大名も泡ぶてうれえてゐ　升古
世を捨てる山ぶれそうえてゐ　吉
えこそ云ふ杉の木　橋美
氣ぶ一や天十ぶてゐ　展沙　路
白雲を見てもぶてうえてゐ　戸清也
ぶりの大僧ぶ焼やえてゐ　下亞
人の来て脚流ぶ花えてゐ　東
えこそいつれ呼ぶ　春底
、　木老

鶺

剖葦鳥（キヤウくし）

之玄
白燐
一風
古節
全
白桃
斉人
竹枝
白桃
蓼古
又昭

白ちとゝ徒やいたわりくゝ
笑しくもて洲うちわりくゝ
芦の手ゝ今より洲りくゝ
ちくゝ拓くゝやりくゝ
苟冪ふゝよりうゝやりくゝ
蓬塔ふゝりうゝりくゝ
杖にする竹の夕をりくゝ
うぐゝいてゝふにりくゝ
ちゝ中に焼ちゝちりくゝ
りくゝ子ゝのちゝよりくゝ
ちゝ子のくゝちゝ任黄ちゝりくゝ

陪石
柳人
一茅
乃尭
全
宜麦
如志字
胡準
柳翠
下文
去吹

葭剤　ようやく笛も哀ハふりし　保吉

ようやく森完て実も見れば　下総　粤紅

ようやく蘇を見に来る画出　昭九

ようやくを人に吹てし　芳之

蒙古しようやくの風　立雨　祖風

鷹入樹　鷹に寄うし白にたれる樹延　白梅

樹鷹やうれも面ふつ風ふつ　宗瑛

知の花のちるも乱れの樹鶯　護物

養鶯　文化や水を鶯の腕をうつ　茎村

ま鶯の乱れ方ふ城りわ　樗堂

ま鶯の人ぶ鶯ふ人ふ　完兆

枝垂　ま鶯のまりぶ鶯ふ　阿波　長堂

風除の樹を方して枝垂　五老

ま垂かくや花ま西ま百　保吉

暮　ふつまふふ花ふ暮　魯力

そて見て外樹を暮　都雀

墻ふ世の人を見しふ　樗堂

森を見て雨ふ暮ふ　于雪

蚯蚓出　ふら　蚕　三　蛹　宗柔　松子

むふ花ふ蛹ふ　立雨　浮流

みを出ふ西の蛹　丹波　南畝

孑孑

ぼうふりやむかしハ清き名の流　蝶夢

孑孑の月になりよる小河かな　希言

孑孑や時に出る先の浮流し　三竹人

孑孑のせかせかむかハなかりけり　一方

孑孑ハ浮て沈むる静かなり　無自

孑孑やとろりとしたる泥の水　麻睡

水馬（スマシ）

夕立の雨を搔やぶる水すまし　素然

水先に来て流るゝ水すまし　梅闘

より来ては笠をまはりて行く水すまし　百池

蛇衣

草むらの蛇の衣出す卯の花かな　百川

引裂て捨る身遁しの脱衣かな　尺艾

蝸牛（でゝむし）

窓に住ハ出れハ蓋をたつ雨垣　右楳

辞しやなれ雨の風垣あり　無耳（丹ば）

たのみ爪き角とし掛り人蝸牛　晩甚

あまりとしもまた蝸牛　寒古

蝸牛や其の角文字のにじり書　蕪村

こりずまてなるうちや蝸牛　今

蝸牛這ひもたれて住もする　白楳

這ひまはる花の庭のきのふけり　百川

あさりもの余り木末の蝸牛　大江丸

氣に向て何の用あるきのふけり　又紹

竹椽に這ふ一筋し蝸牛　秋瓜

牛世にある甲斐にてこそ
伊勢の家系のふれり牛
ゆけハこそ花ふるへ
花ふれ冠ふるへ
髪ぬいて柱にやらそ牛
人ふるそ翅もあるへ
家柱の枝にハ這花牛
ふるふるわふ角を
田塚より一匹ふるふ
教寿千白家ふるふ
ふるふ家のふそふれ

有笠 之頃
京輪 樗堂
吉感 年人
吉牛 一茅
百亮 寄関
京郷

教寿のそろふ
松風や一り動くふ
足すして角を出り牛
いふしや角ありふる牛
まそもし毋ふふふ
ふまり花て元ふ牛
たのもき花ふ角や牛
四ふふふの毋ふや牛
りくて波人ふふふ
牛生危い寿のなし
牛生それふしの家ふ

京 一茶
土嫠 菱亭
堤義 蕉白
白金 尾金
樓雲 樓雲
人 涼人
紀逸 戸 紀逸
志宇 女 志宇

てゝ宋たりけれてゝ蛙しいら　肤黄　文角
小白してふるさとにたりわ蛙生　有斐
蛙出たの氣も幸けゝ　南溟
干菜ゝ蛙ゝ　左文
角ふるハ元にむきらるゝ　流水　素思
氣たけの氣のやすけやるゝ　尾張　兒光
そぶ出たゝて見れいるゝ　常陸　文字
白たれた角ゝれゝるゝ　伊勢　風也
蛙出しゝ人も住れるゝ　奉芳　李東
遠生のゝ蛙いゝるゝ　卜鶴

油蜑

蛙ゝ　下総　古光
打れしゝ蛙生　丹後　支白
氣せゝ蛙出　李尺
ゝ元の市ゝ　文は　仙柱
役たゝハけて見ゝるゝ　下総　可竹
ゝるゝ蛙ゝ　尾張
ゝゝと見き住元ゝ　可竹
ゝゝ住元ゝ　南溟
何のゝてゝゝるものゝ　文角
元ゝ氣の有ゝゝ　文角
打れたゝハ安元ゝ　蜑　文　栗蔭
扶のゝに亀出ゝ吉のゝ　旭女

かるかやの先に結ひたる竿の先　伊勢女　花の枝

いそぐべきかたもあるらんあやめ草　下総　求一

蛇の衣結びけし　衣うれ　曉甚

俳諧發句題叢夏中

五月　孫毛花の遠にうるはしみ　桂五吉節韓

一月九日に名をたれ　白梅

夕日のれさんつけるうるはしみ　松兄

れそはの花の巷の又月　士朗

猶に〇越られし又月　外六

你山木の庵にれすむ皐月　晋二

り先に苔れ抜てある又月　雪笠

そのひと吟ふ又月　深雨

れきくのかゆ又月八重咲　俱雪　黄畏

菖蒲

菖蒲の名を変さんとせしときよりかれ　下総　椿史
ふれのあやめを言ふ句れい　蓬左
竹椽やさらさらとかれあやめ　世翠
門産にあやめ見せうえ家ろろ　業兵
軒のまにかに小流のうるあやめ　吉岱
戸口れハなさの新されあやめ　乙二
湯一ま入ることるあやめ　一茶
山越にかを押さるあやめ　夕閑
花ハうくも完ハ兼ゝあやめ　素堂
陸てこれハ完色うつる殘女　魯堂
春ゝ年と又りれるハかりあり　申高

菖蒲売

旅人の笠にやとるやあやめ　宝境
おりてもて切ふりあやめ　亜浪
うるれハ江ゝのなのやあれ　井肩
絵おを撰て挑ゝりのやあめ　志宇
白雪のゝ伝うてのやあれ　外波
様うも特ゝあやめ　平　長女要
世の中をそうあやめ　旭
引ふてうこうあやめ　石鏡
ちゝと脇にみたり菖蒲　雪酔
川岸れ初花これや菖蒲　白梅
花菖のとり磨けるあやめ　月居
蕉白

新音蔭

長作の代ともやを音蔭夫
女子てあり〳〵ものてあやめ夫
兼分てあやめさしの新揃か
新あやめ市に半ろあるとあり
新の子ろふあやめ夫りた
新あやめこれや一りた忘子
仮初た新やあやめ自の家
梅のあやめたに自ふ新揃か
あやめ貴て新起ろあるもし
世の菊の見ろ〳〵ん新あやめ
笠にふ在かろ〳〵ふを新あやめ

桂雲
係陶
系文
白桃
保吉
全
碧六
一醒
成兵
完来
一芋

菖蒲酒
菖蒲湯

又六の扶に月ろ〳〵不青あやめ
ふ〳〵新もあやめ菖蒲か
芋の不の仮森ふ〳〵た新あやめ
あ不ゆ子ゆ芋と月た月ろ〳〵に
ふ〳〵流の在き新もふ〳〵あやめ
ふき夫やあやめ新ゆ芋のあれ〳〵り
世を夫た磯ありかやふ〳〵ふ湯
ふ〳〵ふ湯や菖蒲ろ〳〵乳のあり
湯あり不あやあやふ扶の股
ほ〳〵ふ湯に金ふ扶のにみた に
長月〳〵に六ろも扶ふあやめか

学笠
志宇
元
金堤
梅子
三霞
白桃
全
保吉
右範
桃閑

言齊刀　若ら代のたゆしにてやり刀か　秋光　見雄
作ら言刀立ハ有あるり粉か　年人
美齊寺　年寺遠の〇ハゆるやし　又位
若ら代や下地さられて年物　保吉
業　玉　業玉やむすれてまれ笠　號芸
業玉の下部や長に美すし　帝言
業玉に毒物の業をうけてうり　上年　業桂
印地寺　強きらハ親のんを年地寺　貞佐
百煉鏡　煉うけて流れうり又り力　菊吉
粉　すしまや男の作ら笠粉　仝
まれ年や粉を作ら美の家　白槍

いとうれ粉もらまれ業源か　保吉
又り白に拙て日ん年を粉か　盛吉
美年れ粉寺もれ笠粉　陸石
代板やむりまれ笠粉　士位
粉しまいらも作ら粉か　仝
笠粉一り位のん地すら　吉盛
白濁に垂まをたり笠粉　成美
拔四て尺ん家ん笠粉　乙二
家色まらの下粉の位位　茶机
壹粉乳毋の作しめ寿年　菊也
作らて来れ年さうし孤粉　常笠

柏餅

粽結ふ次もうつし十団子　旦く

馳走すてふ手に出れ粽かな　扶川

又粽外の柱に掛けをく　女 濱藤

石女のむすびし柏餅　嘉山

幟見て降さ井戸のこゑあり　柳九

源氏画や武者の幟が外のもの　保吉

雲をさし入りゐる幟竿　不冶

打ち出しと見えけり幟かな　蝶六

立つる所を祝ふしの幟かな　外六

君が代の浩味方や幟かな　木優

板りの色も久しきの幟かな　江戸 辰彭

削掛幟

又月もしばて幟の風かな　魯仙

桐瓶の縁でられたるの幟かな　伊豫 其梅

白きは晴て地水の幟かな　近江 松琵

条流の子供の幟はしる松の外　大和 見方

掃除に来てかけたる紙幟　有斐

降る日の外に立ちり初幟　肥前十二章 周弥

多くの幟紙取立てすむ世かな　伊勢 披去

当世と古代も立つ幟かな　豊右

冬のすもうしろは見きなき幟かな　未 子鳳

菜摘

百姓や見えるねばかも忘る　不知作者

菜日

芦火焚て菜摘ひとを待れたり　虎逸

加茂競馬

鼻黑の上なる出てそくへる
競馬為ゑ　　兒童
翠黛越の詩に為ゑ　　同
むつりしきつるを　　白樓
鬢つゝハ光もうるはしくへる　　同
紀友そてしてをしきくへる　　文淡
久もをハ八ッ下りをくへる　　保吉
ミうりの良にあちる競馬　　士紀
をくへる不りとりて入りなる　　外六
尺るん十一方に生る競馬　　李岡
花あやめちるもるをし　　後西　籠峯

竹醉日

竹植るりも人に来て植れり　　士紀
竹植てちうえにり吉の日　　同
竹ハ多植しなれにり安れ　　樗雲
竹うして掃ちやかれそう　　茶孰
竹うしてもとに来てうもれ　　岳絡
森軒人て尺るせ竹の植所　　力化
竹植て現て尺たる小也れ　　尾張　要慧
竹うして光にるもんかくや姫　　雙阜
植こうもちうれし竹のう　　東陽
花菖蒲

花あやめ又尺の家をあるる　　究甚
昨星に二尺代し花ひやめ　　尾張　力業

石菖蒲

むすまに石菖白ふかれ水
石菖や磯の苔も乗渡り
石菖をよろこぶしてを屋の滝
石菖やかのれもれもいさぎよき

花旦見

うらやかつ弘り頁具を
世ふかやかてみの宗うて
泡入るなるのふるもふるつ
疲うの根こそ咲あ宗屋

芙蓉刈

碧色花蓮芙蓉刈
芙蓉刈 五月五日洗菖の根

蓮卷葉

ちこちと卷ふ蓮の花を

蓮

蓮浮葉

浮蓮に魚寄れそもうる
池の蓮生生ふ浮葉の風情ふ
花ハ紅蓮白蓮ハ蓮見舟
蓮咲ていやしきふかうう
ヲケ入やはを宗ふ蓮見舟
白蓮に人ケさる宗ふ
吹売のはを根る蓮見ふ
日元十や蓮の宗ふの風るる
黄併うる蓮ハ蓮の宗ふ
咲うてふ宗ふ蓮の花
白蓮に夕蓮ふ宗ふ

蝶蓮
芙蓉
庵人
蓮
蛍蓮
白桃
護物
李蓮
也宵

但る
野牛
にて
丁度

犯す
乃元
之を
周文
今酔
凡童
蓮を
蓮村
花縣
蝶蓮
百姓
白桃

人まし蓮のうへにうつり
白蓮の葉やゝきまたれつゝ　宗漢
白蓮に傘もしをれぬ　百昭
村白ハ月れとまり蓮の花　保吉
ちらけ中き雪実白の蓮哉　斗入
屋敷つゝ光の蓮のそらさく蓮の花　士朗
山本や白き蓮かる秋月哉　全
うつろいをうけす蓮か　昭丸
村人の手の提灯とり蓮の花　全
月とれ中舞ちりさく蓮　円林　樗雲
蓮の葉に女性ゆうすり　倉洲　洲夫

○五七

蓮の葉や蓮さくれ蓮　完秀
白の蓮完と一時に雨ふり　沙羅
雲霧に雪ふる蓮と花ちり蓮の白　年心
ちらちらやうに起て蓮を切　芳之
大々の蓮ハ蓮さく蓮ちり　一年
影ハ蓮や一の尺ハ蓮の花　五蓮
秋朝雨ふりさて蓮白し　全
ちらちらに蓮のうゑるとハ　雪光
秋白の中にはらり蓮の雨　乎洲
風をまつ〻ハ蓮の花　亜俊
丘の家や蓮に出て又来淡　一茶

白蓮のそのてをやすめてうつむ
公蓮や抜いらごの中ふれつまはれ　浜松尼　翠生
葉ちれたちてうれもれ蓮の花　寿花
公宴に用ふこひし蓮の花　鈞義
蓮とても笑ひ咲よりかハるし　白光
白蓮の一輪咲ぬ稲の中　尾州　東陵
葉ちへと枕ふれそう蓮の花　葉古
蓮の夏や定ってもあるる　蓮女　蒙庵
葉の花や片ふれそうもすむ　蕎村
乃辺のみ葉花さく雨白　仝
その花やあるふれたれ風さく　白雄

その花に吸ふ蓮花秋ふかし　葉丈
その花や引ぬ中ふそり侍院　蒙芸
引及や深き葉の花のさらさら　陳美
心ふれ押ふりうる深葉子　鼠吉
その花に夕風ふと解うり　兼波
その花に抜て小舟命小　遅白
もの花やさかりやすれ限　白芹
小花花やるにうたれと侍ふれ　乃亮
ちちふれもにすむうりやあ光　仝
村ふや深葉うきく花ふらく　一芳
その花ふ咲ハ咲ふり原抜の子　笛光

岸

水ゝ流て硯に浮岸の花散し　男 鶴基
岸の花や水のこゝろを咲乱す　瑞馬
岸の花や風ハつくともみえし　篠嘯
岸や蝶の力の押へても　女 千代
岸にうつれ子物ふ汀かな　百川
岸の菫冬しや子眺　蓬左
岸や折れし尾の手紙読　白焼
岸に竜みえぬ迄来る　保吉
川ありけて岸越す月夜かな　重厚
岸をつけて花ふ小紅袖か　斗入
岸に月うつくの夏川かな　琪六

押されね世や岸の花たゝ　逢月
岸や寄りてうつふ夏の雲　長翠
岸やみのよまてさし雀　素閑
岸の花とていく菰ゝ菜屋　一茶
岸の星や苦き茎の漣　亜笛
岸の花や氷りつらしき　回人
岸の花に飛入てふの子　女 志宇
岸の花もたつハ月かな　雉闘
岸の見え入る松まかりしかな　斗白
岸の持ハ小町も出たりし　孤雲
桃人に似て岸の咲にけり　尾張 旭山

蛍草
芋花

芋やうゑて仏の上の石と
芋の花まもる石のしるしかな　栗大
芋やけのうれの葉ぬれし　仙志女
芋をうゑ八へてわるし爲の風　てる
村雨や屋ハたゝてほるる芋　起石
君指人猿の故也や芋の花　子孫
芋生ぬ年や花咲ぬ雨ぬ打ぬ　子規
村ゝ雨ぬ芋ぬ人を芋の花　麦生
笹を芋て十日ゝ芋の花　士朗
ひやゝと風もふく芋の花　合
ゆうけて百ゝし芋の花　洪水
芋の花　玄英
乙二

芋の花人ちうう打ちうう
旅人の現ぬに来る芋の花
今の来てさゝゝまゝゝ芋の花
白雨の訪や先ゝこけ花
訪木の陰明ゝ芋の花
庵の芋花ゝゝすべもゝゝ
ゝゝとゝ月ゝゝ芋の花
蛍ゝゝの奥に咲ゝ芋の花
松風の絶ゝに咲ゝ芋の花
なのゝみハもめわゝし芋の花
花ゝゝ芋ハゝゝゝの来

亜浪
菱亭
桂堂
芳閣
蕉白
一茶
民陵
三津人
志宇女
梅川
尾張
武雲

百合

雪のうけもてまてと苔の花　推己
水青を宴風情あり百合哉　女子代
しゆりや苔しよ時節の立派　蘭左
しゆりや歯栗の刀より一つ咲　白梅
ゆりの花をとりたしゆれ　士朗
ゆり咲て地中の清水流れけり　巢兆
桃節やのゆりうつく美事哉　成貞
さくゆりの立のそばより代哉　左亮
百合さいて白のうしろ人に　仝
百合の花のうしまをゆりの花　青閑
谷の花ゆりの花いうゆりの花　素迪

石菖花

赤ゆりやにはの花の里のや　蘭松
長ゆりや指もとられぬ石の花　女子代
男子花つませとまうし石の花　武秀
ゆうれ花てつくりもの石の花　石歌
石つむや赤ゆれ地の昇ちち　長常
石花つむうしろ姿をてるれ　共答
石菖の花ハさらも咲ちり　丈方
夕風に交石菖ちり　尺笑
見ばりてあらさやと石菖　栗更
家の株の菖子咲ぬ庭山家　株方
ちつけやりに菖れる花の毛　可粒
　　魚文
　　吉岸

金銀花

夏菊

紫陽花

右節
百日紅
花縣
姫九
紫兆
平角
雪笠
瑞雪
柳花
蛍草
百日紅

紫陽花や榛の殘りし淋美桃
紫陽花や氣にうつむくあるえ
紫陽花のすこし寄る蒼ゝ
紫陽花や折れて花の空ゝ
紫陽花やうつゝ氣の淋しさ
紫陽花や杉の風はかなき
紫陽花や色見てより七小所
あらさのれ花や咲ます
紫陽花ハ花をあくの化粧れ
紫陽花や文ハ今ゝ者の妻
紫陽花をやしてあくやそ夏

茅文
化粧
合
保吉
又嶽
姫九
雪萬
成吳
白柳
乃老
素葉

瞿麦

朱面赤やり数さかりき交戦場　護物
朱面赤の杉ゐる千百をさつやつて　北溟
朱面赤の花にたゆる千俵百　鶴秀
朱面赤のうふふ杉の色さうう　松江
朱面赤にうつり安さた衣の光　望塵
撫子のふやまつん雲沼　春亜
撫子の交ますてうれ撫子の雲　昭九
撫子さくや雲をかるして　華泊
撫子ふしくさたメらあ　成矣
撫子れうられて杉ゐるさうと　今
杉ゐ事古りしさ世撫子　著之

かすてこ千百のやりのゐう素ち
撫子たそうしさら新ゐるうう　禅永
撫子たちとこたそうし杉の風　丁拙留
遥生千撫子をそれうさそし　一茅
花麦もかふ世のそのみ撫子　道光
撫子の花にさうりしの白　今
舟戸の撫子たのし境ゐれ　夏之
撫子たぬうりゐうこ変春　樓雲
撫子千汐風ゐる雲ゐうも　雪笠
撫子れ地ゐにケ麦のれ雲　二存人
撫子ハすう花ゐして見すたら　女志宇
　　梅河

投子の一本樹にこたへけり　渭水
かすてらこれ江の人そ雀の子　兎素丸
投子を送られたりとさゝく　鶴之
投子に鼻つきけて是蔕か　賀尺翠
投子にそこれうしし山路か　屋望山
扇子に投子を姫　地蔵か　丶
雪文や晴天すしてとまり川　碧大
雪文を南方ちうに坂る　蕪成
きたちくや花もうこれ是の蔕　東陽
地市も晴約子の太りか　淑英
庶子りこのまをれすり雪　走　兎山
江戸　笠屋

酢漿子
春花集
蔦花集
藜

乙二
合

花百ちとかく　雀
ゐさこれ花の方も朱にかり　道堯
花氣八春の夕こそ見れかる　素郷
ゐ花を氣れ松ヶ戸の花　書丈
和子のたくゐを巻や藜の立　紀寸
松風の藜子多ゐる山か　岳文
滝つれ立　蔦にたらくや土圭子　對子　花晩
きゝ木くのそ立つ沸蕎　道堯
どくたうや夜のまして花ゐし　雪笠
一ッ夜の十ゐまるまるけりか　道堯
若川でいちごゐるの及たし　柳居

酢漿子
春花集
蔦花集
藜

花百ちとかく　雀
ゐさこれ花の方も朱にかり
花氣八春の夕こそ見れかる
ゐ花を氣れ松ヶ戸の花
和子のたくゐを巻や藜の立
松風の藜子多ゐる山か
滝つれ立
きゝ木くのそ立つ沸蕎
どくたうや夜のまして花ゐし
一ッ夜の十ゐまるまるけりか
若川でいちごゐるの及たし

時計子
言幸
十茉花
一ッ茉
覆盆子

心路の杖にたりつるいちご
岩もるや旅人宿ていちご　曾丘
あかさん淡八束松の志りか
葉の実に斤積落る時うれ　一風
爰の実や折りかうしるの色　梅関
き枝に成るや夜の板ひさし　風狂
き梅に肩をつるる美人か　竜おり
枝熟に折れたる是しか　白梅
き枝や地もぬきまこれす　葉兆
き枝をそへてわく小百か　去嶽
成るき成に成るより葉の枝　屋鈴

○六五

柴胡
桑実
藤実
青梅

南天花

瘦梅のかう年さへもうかう
南天の花のこぼるる是うれ　石麻呂
南天のかに花ぬれや板屏風　可慶
塩の葉や南天の花のちりる　西日
栗の花赤ちうて開しさも　春亜
夕風や青葉に栗の花　尺丈
葉ちと出し栗ヶ栗の花　道光
赤方にちる青しちりとれる　桂雲
你ら本に立地をうれて栗の花　呉老
地の花さうに咲しちりとれる　玉光
陸おうね穴の白れやうれ花　玉芝

栗花

一葉

椎　花

杜鵑花

合歡花

椎の花人もすさまじき匂ひの風
ふくの果に下あり家や椎の花
ゆふ雨に木ゆけを見きて椎の花
雪にかけるけしこしのの花
不日白もてらわてうしひつし
名歌花木陰人もなにくゝ
まのやのぐうあるやや合歡花
名歌咲て人をうるを森か
をしまれにりもちる不名歌の上
名歌に風乱れ春ををうう
名歌さくや世にちれるを蘭花

蓼村　春人　長老　惟平　外菊　白桃　蓼古　保吉　昭九　年仙　道光

梯　花

花招椒

水歌ちくや毒ちけちるみ屋
森たるわゝ水歌の是の数の内
水歌の木ハ花より多きを木
酒の文も考ちやちんみ歌花
ちくわせを咲よれくみ歌花
夕風や少家の水歌のさう風き
短夜ハ木うも見くりわ夫花
水歌の是をすくひ文さるあ酒か
法師のやもうをうみ歌の花
長梯の花やあるりを咲ふん
白頻るや咲たつ花ちくろ

越中　其仃　西牛　敦仙　馬老　陸奥　二葉　東九　秋兒　都雀　素卿　雲椿　護物　金城

出白仁道記をつけて京松梅

花樗

花松梅千や白仁枝麹子

先ずより花樗に碑注れ　　唐人

樗や枕子京の杉人光え　　垂枝

樗や月夜ゝれハ落せゝく　　白桃

樗の蒼ゝ子きゝ乱し水　　保吉

樗のゝ子へ子へ白ゝ子　　渕江

夜を子ゝや花樗の夜の坪　　乙二

樗や子ゝ白ゝ子ゝ女子遠　　青渕

樗や白夜のゝれ玉ゝ子　　芝高

ゝ子ゝしの樗多き絵ゝ子　　雄今

樗　　朱光

花樗ゝ子ゝ子ゝ白ゝ子ゝ水　　樗良

花鞍の月ゝ子ゝ子ゝ子樗　　晩甚

村白や月ゝ子ゝ子きゝ花樗　　白梅

入子ゝ子ゝ子ゝ白ゝ子花樗　　甘谷

花ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子樗　　自居

ゝ子ゝの新子ゝ月ゝ子ゝ子樗　　乳阜

とゝ月ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子　　江戸　枕枝

花樗をゝしの片ゝ子ゝ子ゝ子来る　　星諸

ゝ子樗子の花ゝしゝゝと咲ゝ子ゝ子　　伊勢　涼石

ゝ子ゝ子ゝしの子ゝ和ゝ子ゝ白ゝ子ゝ子　　不蓮

ゝ子ゝ子ゝしの花ゝ子ゝ子癖ゝ子ゝ子ゝ子　　以足

夏木立

梔子の花や高き婢女部屋　護物

口なしの咲こぼしけり門の内　三津人

口なしや夕されば月も出れ　了年

梔子に一重も花の香　氷水

家ありて一筆越ぬ夏木立　暁基

家に尽くまの人入ぬ夏木立　蔓左

酒十銭のみてゆくや夏木立　其杉

出る来ぬ子供はあれ夏木立　在施

夏木立人の上には坂もなし　百明

駒き匂ひ甘き匂や夏木立　又明

夏木立気ハちひさく成にけり　成美

白雲にあけの雫や夏木立　尺艾

鶯鳴てなくさむのそそ夏木立　道彦

行つゝハ流れゆくの夏木立　岳輅

扇杖もなして居る夏木立　三津人

いは来ても夜の明れて夏木立　壺伯

人の見る曙ぶりし夏木立　井眉

暑かや旅ねする夏こゝち　陸奥　都静

百姓の窓まハれよし夏木立　紀逸

馬肥ぬ気や枕も夏こゝち　鳥頂

川風や暮りたる夏木立　雉啄

夏木立中にハ男てらりれ　竹頼

竹

竹や眼読をうつる白の毛
竹や牛のゆく節あらしふく
竹ハ月にやうつるかなり
竹やうつき菓宮の白さし
竹のりれ有しかるかな
竹に立夏の名ハ拙れ
竹の家も明日のやうれ
菓に碎て竹殺の掃除れ
竹に隠れめくる焼蓋
竹の梵にはくりれ光れ
竹のゆうつくりれ蓋れ

○六九

鳥酔
紅梅
焼芸
百姓
麦丸
梅人
士紙
仝
成美
養孔
去高

今年竹

竹の打ふくれく伸うるり
きいたしてそとけうる竹今のうち
竹のゆうくとしてせにうるれ
竹や雲ふつ菓ハ今の年
松を越て竹の新蓋うる
竹にれハ没ふく来にうり
竹の家をうるやれ黄れ
風これ主を吹ぬやそま竹
それうくそれうくてそま竹
こ竹人のたけハこれうり
竹ハるるくけれまわこ竹

月日
一菓

魯原
一菓
中高
樹河
湖中
青り
女子代
菓左
斗入
洪道

竹皮散　雪燒
瓜花　桃史
　　集　賦丸
　　越中　萩人
　　晩甚
　　書蕉
　　有筐
　　奇剛
　　護物
　　清人
　　桃園

胡瓜　七星
天瓜花　富春
早松茸　江戸　青花不
子苗　周馬　秋庵
　　白燒
　　保吉
　　春亜
　　柳莊
　　完来
　　道亮
　　雲燒

田植

田一枚子苗に植てうゑる
苗運のより移る日かなる苗
時道やゆつり苗運び　青閑
子苗舟庭にて庭の泥来れ　竟松
満田のかりて泥くず苗れ　白塘
白雲の下子にうる苗れ　渋舟
子苗とり出のけ女丈より　雅平
苗たて植しもうるよ苗れ　蒲阿
松にりを訊ひ気る田植れ　幽晴
ひらしてりより田植笠　字素樸
絵ひて陽る田植の男れ　蓼古
本のもとや松赤にふる田植酒　公
紙やうに白雲やや田植れ　芳村
赤ぬ一や田植に泥の白の月
一枚ハ月夜に水て田植れ
植て赤る山田を麻の遠りる
ひらひらる植来る水田れ
ゆう星の数を田植の宵れ
山院へ雲のりつる田植れ
鶯氏子の田植笑ひ千鳥の子
植赤ぬうしろに蓼る田植れ
侍に乗られる田植れ

白雄　尼諸九
保吉　晩九
士弘　公
仝　芳之
樗堂　雪成
蓍二

植つけて月ハよの田とかすみうり
つやくと植て去りぬ一枚
ゆるやかに田植の笛ふきの枝しる
いくせうつゝて田植のた歌
をぬのたつんに田植うれ
うくをて鳴さうるゝ田植
萩萩のゆれたるつの田植
人もう植ていたるゝ田植
田を植て風の戸ゝと来てうり
ゝうのやうにそうて田植
り合ハうゝさまう田植人

大阜
道充
合
等充
青閑
魯原
蕉白
武陵
等笠
長高
座来

田植唄

道端人影も来て植る田植哉
戸にまて植てたのしき田植哉
松ゝけと来てうゝ田植哉
帳の内にそうて歩き田植笠
沈に鳴ゝて田植人
田を植て鶴も来ぬ〳〵ハうし
田を植て去ぬ水の長い事
よりおりに合のつゝ田植哉
松風ゝしるに植人田植哉
山法ゝ人ゝ歩りて田植唄
関に村のゝまるゝまて田植唄

樹生
卓陀
釣翁
山人
筑紫
其柳
都賀
安藝
太容
丘鹿
及雀
竟古
低書

文芳の義八幡田植唄
文みて植植さる田唄
植〳〵て只一枝の苗田
傘さして植られし苗田
中〳〵に八道ある苗田
見ても〳〵苗にてうり歌
踊も人も俄かにさる苗田
泊りて信さる樂仙苗田
出家そよられし田に茅の花
大切に敬ふのさる苗田
ゆく人もさる田と来れうり

足直　月ノ湖流
無沒　一茅
左ノ　大阜
白桃　有兵
白燒　仝
姫茅

松見やうさたて田八さし
松ノ枝の大を挿〳〵植さる苗田
稚さ笛田八さ〳〵さ〳〵さ〳〵り
大さ〳〵れ植木ら植さる苗田
大を貴て尺さる小赤の苗田
打〳〵れ千さ田の夜の寒
下刈に苗田さ〳〵小殺れ
さ〳〵もれさ〳〵の不田のさ〳〵

桂花　月ノ
芋笠　一茅
白燒　花陶
蕎麥　桑蝶
梅同　吳光
蟹茅　蟹左
白燒

田芋取
笠の揚れ彫さ〳〵二番芋
手のいさる丈物さり田芋丸
よ乙女
よ乙女の簑ケ抑重箱たり

兎の子を抱くやうなる植女かな　仝
田植女のころびて泥の顔となり　暁台
打笑ふ早乙女手をとらへけり　保吉
田植笠嫁は振りをさせもせり　大江丸
早乙女は袖よごしけりあちらへし　蒼虬
早乙女は衣辺の燈もみえにくし　乙兆
水も町も早乙女をまつ宵も哉　月居
早乙女や箸にさはるを花　一葉
早乙女の笠めくる雨を柳　松葉
早乙女や髪は十日もぬれて　又鋤

蝉　初声

初蝉や朧残る月は百夜　又照

蝉

初蝉やかまびすしさの空晴し　几鳥
初蝉や雲まに花もちる　梅間
初蝉や夕暮の声はその中　寒松
初蝉のしきりと声に明ぬれ　梅暁
初蝉や白き夕への花は散りけり　中路　其川
初蝉に本をとり出すをりに　李華
風は蝉は吸ひて一木に　鳥酔
蝉の声猶なる花ゝ　暁台
みるみる空さえて蝉の声　几董
まちの果を枝や蝉の声　菴ホ
空蝉やむなしき人の果　諸美

松の木やうへハ紅くうの花の
咲ゆて魚釣りゆく縄をあ
ゆ咲やなほ世をれるう桃の木
ゆやなほ咲ゆ咲義人てをきれう
又やけのやしやをせ松の咲のあ
ゆ中にきうく咲のひつあ
拙のにけハ咲うく木法れ
塑に来てうけハ家うく咲のあ
咲のあり新にけハうるつあ
咲うくやうう意うをつあ 時
人に咲れや庵と名をうハや

白梅 公
保吉 公
斗入 三歌
春亜 ゆきき
徒名 戦美
只角
士鈍
公

てもやう咲を法世にしの家
咲ゆうう咲ゆて山ハ出れうう
咲うくや井戸にけりひりせにれ
咲うくやうも鈍うく法の寿
をむいて不ゆうもうや咲の飛り
文咲のうくにハけた縄 籠
世ゆむ木法の星や法の咲
咲うう出やうよ木りうるうに
鈍けて実ハけそ咲のあ
家をうるあ世ハうけれの咲
鈍うれ木もたゆれたや咲れあ

公 祥永
ゆ鈍星 公
公 素槃
公 素卿
道光 公
自兵 寿閑

しれや花を引蝉の聲を鳴　平角
蝉鳴や桐になり絵の内　桂雲
蝉の鳴木ハ花よりも静之　荒竹
旅人をまねひやうり蝉の聲　卓池
鳴もうし唖蝉ハやさしき気あり　淀人
鳴立て幸つるゆふの蝉　護物
蝉ちくすやれてくる隣の人　麦之
蝉の聲にうつて雲ハなりけり　米尭
唖蝉の見けれ竹をとりけり　四人
蝉の声かまをそもや文花　定阿
豊後
蝉の声をとかしおれ見やや舟　菅雅

蝉時雨つもさいふの涌尽きん　湘井
尼
蝉鳴や池烟の半の蓮の上　素月
夜の蝉ふるへて鳴けるり　久蔵
尾張
蝉鳴や子代の浜の新の岩　吐山
近江
声いふる蝉一声や夜の松　舗席
山蝉や登戸の小水のいそしき　百枝
遠州
蝉鳴や眠ふさげハ歩の中　天山
蝉鳴やかるげの芋を刈り捨て　支手和
青竹の枕作られ蝉の声　来丸
尾張
竹との雲の重れてゐり蝉の声　龍眉
女
鼻先帯に押あてたり蝉の声　文元

蚊

氣のうつるまゝにかの
古井戸や蚊にくゝ魚のきこえし
上見に蚊の流れり水川か
まれつゝし起へ蚊を焼君ら兵
寄焼してちやおそ蚊るも素ちえ
仲伐て蚊のあきさゝれ
さし入や人をうきて蚊のん
玉の蚊えてや焼れて明蚊か
蚊の中へ松をたゝりあか
とし田や蚊にたれそり伊きう
蚊たゝをのれるはたる拳か

古節　芭蕉
合
凡黄　一柳
白雄
保吉
南北　蕪村
大江丸
松見

蚊ふりや碎人の足に絡りさし
蚊えれ中に立捨てある灯か
蚊のん塚ふれまそにつゝりう
蚊えれさしの気にうへしかか
至えれ蚊えてるる柄にちりる
芒より蚊のたる方にちりう
蚊の寄りの水についたる蚊か
蚊たつにまそ迄きゝれ
出てれし蚊を入てみれ焼にう
小底や盥ふれて蚊の迷に
磬拭蚊ハ君ら代にるもれ

士弦　女芳
七翠　湛六
合　策兆
柳蓋
乙二
道光
合
一茶

桜のあるや桃若葉の陰もしき
桜ちりてうしろ姿の山おれ
雪の城の豆腐ゆりの義経忌
若葉桜やつゝまるよりいそやこを
桜江やあるより起る若の雲
凡筋にる桃ちる不桜もいん
桜に桃ちりやうちう舞うち
久米や明ぬ桜の宮て月にあるる
庭松に酒吹て桜をたうもん
ちつ桜をたやすず桃ぬせ鶴そ
食ふうしろつ人も桜にくれう

眞て　信
若高　杜厚
一条　丶
平角　可弟
京人　養嶽
石清　直美女
五光　つゆ

桜

桜の蕊ふるし雀のふるうり　無底
ひるゝ桜の雨ふる白のそし　桃は　春楽
桜のあるや一日清おのをき　青良
弟しき桜の初雪ゝ雪の月　若節
桜桃や青くの花のちるあるり　晩菊
桜桃や桃色ゝ赤にいれるそ　蕉白
桜桃やりうちき彩の松　懷炎　霜操
桜桃の除ほのゝとうの月　製法　牧童
桜桃の和八のうちき板れ　一茶
桜桃へつゝけて桜本れ　東青
桜桃や庭つれゝて残る月　由之

板き火

板柱をゆるめる風もすさまじ　蕉雨
板き火の燈の末に吹く板れ　魯白
源氏の夢さめて聞く板き哉　蕪古
家家や面さ板きのりとき　東耳考
板き火にむせて打れと云こ　保吉
亡王の板きハしの白ハれ　公
メラ〳〵板きとへつ岡の家　誇石
板き火の末にて蓮の角れ　松兄
流うつや板き巻のこりの月　外六
打ものけれ板の板きやゆく　移
松に爰それさへも板のうらよれ　安房　世子

世のあはれこの板きも板きれ　成美
木こりにうたを聞く板きれ　八旦
学にうすのみて板きうれ　年仁
板きする月も有の松の枝　只雄
板き火や扇のつれて笠の雪　可紅宜
板き火や姫切の吹も寒ゝ　富之
板き火の中ゝ吹る横うれ　不寒
板き火に志ゝ迄ゝ不堅の白　魂前
板にもろき泪ゝたる板きれ　武陵
世の中の末にて板きのうしろ　学笠
板きたゝ有ゝ世につれて　申富

一茶　魯隠　秋夫　嫌霞　夜来　梅岡　鬼洞　尾花　而后　其映　紀ち　天弓　姫丸

蛍火や
蛍火やちる蛍やちるね梅の葉
蛍売すしの肴中英うう
英のうへ吹るこ屋るれ
追れてハりたるるこ屋るれ
蛍火の蛍の葉宿て蛍れ
蛍や蛍英人を訪ふ英の雫
ひろ松や清んとしたり蛍
やちつて清まをこ蛍れ
伝追て屋にうて蛍れ
れくや英る葉たれハ光蛍
りれ夜ハ地にけうつる蛍れ

柳屋　蛍葉　仝　英古　英お　白雄　仝　家文　仝　保吉　吉義

[illegible]
来ぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]

一茅　大阜　道堯　乙二　仝　養子　氏坊　寿閑　木海　槐義　寛松

魯源　毛旋　长高　竺光　白人　蕉白　玉屑　一茶　梅閑　亜浪　方明

萬和　雨尾　雨樹
湖中　太和　隆雪
與人　女　孝七
甚成　筑後　栢翠
仙風　南堂
國村　武州

出羽　和夫
女鹿　呂調
北尾
筑後　東彦
尾張　雲天
白樹
山城　春坡
三省
土佐　椙栄
尾張　黄心
下総　観之

あり、あらハ糸をよいへ、ゝ尾ゝ
水ゝのゝれハ毛に尾ゝる　三河　簑と
きゝ縄のゝ、ゝ、ゝ色の尾ゝる　尾張　草芝
ゝの、ゝれ毛に、ゝる、ゝ尾ゝれ　　右弟
ゝ舟の上にゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　　竹ゝ
り人のゝゝを、ゝゝゝゝゝ、ゝ、ゝ　　表、哉

廣ゝ化雲
夏　楪
蜘　子
縄　虎
縄

蜘の子ゝ糸引ゝ、ゝゝゝゝ、ゝ、ゝ　安藝　雲石
ゝ乳に、ゝれゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　伊賀　敦竹
ゝ、ゝゝ縄ゝ、ゝ蜘の肌の光　大和　其枝
ゝ、ゝ時ハ縄ゝ、ゝ蜘ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　伊勢　至江
縄ゝゝゝ分ゝ、ゝて、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　　麦右
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　　巻ゝ

竜信ゝ縄ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　合
いゝ、ゝ上ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ縄ゝ、ゝ　蕨右
縄ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　蛍葉
罷ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　几帳
祇の縄人の狭ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　代巻
檜麦の祇ゝ、ゝ縄のゝ、ゝ、ゝ、ゝ　長翠
力ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　道溝
縄ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　一茅
縄ゝ人ハ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　尺艾
松ゝ、ゝ縄ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　桂屯
粥ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ　月化

蝙蝠

蝙蝠

その年世の中よしと蝙蝠さま
蝙蝠をうつ的ハちりさまんれ
樣の戸やさまんありて蝙蝠
葉末の蝙蝠長ふ乳や蔭うし
家をさまんとかまふ奉の蝙
おるれも赤実蝙のつのりれ
井戸やけりたるとて赤の蝙
蝙蝠やはしの赤の樣 屋
ふ戸りやれりおりをたさん
蝙蝠やはもれの女房こちを見る
蝙蝠やつれ洗濯のまれ元

一茶
雪樣
小元
夏之
枝長
武蔵
有寿
立志
夏古
蛍蕭
蓋村
保吉

蝙蝠やはもをあふぎたてり
蝙蝠や夕暮をふまるも打ふへし
蝙蝠やこん世ハ雀ゝ号 比
蝙蝠や屋とまへて人たり
樹の葉を蝙蝠ん蝙れり
蝙蝠の樣ハ拝れるれ 袁
をりて蝙蝠の世まりり
蝙蝠の氣を見するれ袁れ
蝙蝠や打のれくゝ蓑ゝ
蝙蝠の樣の樹の葉にゝれり
蝙蝠やるの打れたる波浪

凡
諸九
蕉之
素郎
月化
一草
道光
一茶
蝙蝠
井有
晩翠
美沙女

水引菓

[illegible]

陵賀
松旋
輪之
春人
栗丈
合
樗雀
槐前
三位人
菊也
寒松

水鶏

[illegible]

梅河
ふ影
栗年
釣前
月丘
湖水
ゑ陳
栗丈
蕨古
合
焼素

[illegible]
[illegible]
橘の花ふきかをりたる夜の
白きかをりに鶯の
橘ちは老ぬれども
ひとつ実はなほ残りて
村雨の降れば出て来る秋鶯の
[illegible]
雨風や[illegible]の滝の音
松風も秋はあり鶯のたよりあり
白の月夜の鶯の[illegible]

百首
百首
[illegible]
書川
[illegible]
士[illegible]
仝
仝
桂[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

魯隠　夏月
羹言　平角
月化　樵史
蕉白　井肩
学笠　護物
三歳人
于嘗

漫々　秉耜
釣翁　掬月
永高　秋帆
詠月　徐英
女應々

二塚　雄合

粉川

二ツ川て恋もてるとらわるへきか
まつれたくくとれちれ白のようなる
俗白のようハとれちをけつり
老たれとれまれあてんちやん
まてしるる良もたくさん粉の箱
けなれ粉れ大さきわも泪ハ
表の粉のうたをうやむ箱ハ
家近く粉のおう表ハ
乙川を湯うしてかる粉ハ
来ヤ粉とのれ魚沸し
老ちし粉泪とハたれ

越後 子戚
寛政年 今見
春思
古節
抑発
焼芸
浅と
茶文
蓮古
英お
仝

粉の骨に魚より出ル骨ハ
粉の粉に粉近ひりれ同至ハ
多る表のれにさて粉ハ
粉の歌の能尺てくさるるるる
粉の狗ハ流うる岩のたれハ
一たれハうて尺を粉の箱
箱沸て赤ハれ粉ちり
まつ戻もうてるりう舟ハ
う泪川文の表をを完たり
る光ものて分ちそう泪舟
又羽きしれたう粉の良ハ

尺焼
仝
岱吉
保吉
仝
又助
士助
仝
柳荘
供六
花縣

のぼりうせ大ぶくとなりて
きちせ教うにうる松の新
うきんの方に火をたく白貝
を拂ひ掘にて見るくらんれ眺
うきんやいつれとなても人の新
う泊まろひるうあれたりかゆ花
多くきうれきうれたれけりね
白の舟も人もうるうあり
拾ふれ明るれてや物の人
山風や是まてとんらうれ海
古戸見そりやうつて法の雪

昭九
弁六
一醒
午人
五方
乙二
合

一草
反光
養机
夢方

風の見とてそれ火の名残り
打の世と舟に食てう明り
下るとても打ちも良方るう明り
う舟り沼八条の川辺り
長松ものりりれうあり
祇園の時過むうあり
成るうれ使うれ人れれ多
投ふれ拾わて来るう明り
うきんのてやうつんの月うん
よくふりて釜のうりうあり
ふるあるかのとて見ねか移り

合

賀く
麦藻
橋屯
少汝
一茶
雪子
有斐
青方
雨晴
吉日
吐風
夢方

人のなれうるの地にあるなり

文の表れにあるなり

川鳥やう鵜つかふ川人

翡翠の鳥なり

中鵜　持を翡翠の小指に

立てやう翡翠なり

川鳥やうれ居るも後到松

鮎とやうの鳥に魚遊

遊とて枝に去居るを枝

鳥とれ指して来るを枝

家のなれ小子なるを枝

羽抜ケ

翡翠

羽抜ケ

羽抜ケ支をれ抜もうし

あるなり一方に抜ケ

鳥に去居枝ケ

羽抜ケ年の本にうたれ

鴨のなれ生うるに表れ

かれて去るたる表の

松鳥をこめて本鳥の鳥

八九月鳥子月見遊る林に

そのれ原にを鳥子なるを

ゆう六月除ケ鳥子に

痩せれ母を抜て鳥子に

鴨　子

軽鳧子

鳥鳥角

鳥　子

雷　子

槐　鳥

末　芽

魚遊

芽之

雲　鳥

鳥　子

鳥　子

鳥　子

夏麻　吉川昭九

照射　道充

大串　寺岡乙二

養軍　養白

蕉白　桂堂

玄随　麦古

夏麻の苧績の実
夏麻の苧績の実
夏麻の苧績の実

干饭

小篠

海老蘭

有喜日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

起卧の人老々りて又りなる
又りなるやとてうきく元うつ
又りなるまのやもうりう
義士の名ハ老たるうち又りなる
ゝゝゝゝて中れこゝの横うれ
又りなるまの子それの木もなのみ
夕多みゝうしくゝたて又りる
ゝゝゝとてふくゝしまり
表なるまの又りなるのうて玉れ茅
又りなるつる情うゝ小盃
又りなるやうるの中れ次うしら

文方
書信
沙羅
きせ
成吳
公
完来
午仏
可起
公
永寒

又りなるとれの長くゝ中の
又りなるにうるとて松ゝ根元
又りなるも漆にうりぬうつ左手
又りなるやゝ表長尺てゝ長尺表
又りなるまの芒ゝ表のゝ
又りなるの芒焼ゝて美たく
又りなるやゝ表のうちゝて物
第木ハ木にうりもたゝまりなる
ゝりなるやゝ人うられぬ筆の花
又りなるまゝてなたゝを尺ゝ数の所
表碑にる碑ゝ又りなる

月乗
公
道元
公
乙二
養孔
岳絡
美子
一子
申子
粤臣

生舟や朝に計されかりする　桂宅
ふりるあれ外にさやぐ山ぶかし　一葉
ふりるや枝の雪をふむ　尾全
ふりるに寺さきいる春れ　学笠
ふりるや孝も春にたちれて　蕉白
夫をうつ不ふりる波の敷　武陵
ふりるや牧て実さつつ新の子　卓池
さらさと筆刈人やさるる　寛松
ふりるやいつさき豆の花　對山
ふりるや時し夜見れば天の河　鄭谷
八阿さそ降さくしふりる　志宇

ふりるも別つふりる　晨然
ふりると見てを閉ぢる外の雪　復柳
外へにたきを雪の雪やさるる　竹枝
ふりるや猟にされし跡の魚　蓼丘
オにつ不りさにそ流ふりる　不特
木とそと列金のふりれ　梅雨
片はにさ不ふりるの屋　双鳥
新ある雪のふりるふりする　天牽
ふりるやとふるさるの花　誘阿
ある夜のにく疎しふりる　東高
ふりると見筆にあるしむ夏さに　宇柏

梅雨

宋の戸や又ありあるとかよ于大机
又ありあるや余のこゝれのんちち　吉良
花うゝ淳句しゝりゝ白　岐東
池のゝ又ゝくゝりねゝ　戸硯高
又ありあや位栗ねゝ子をゝ　實
入梅れひよ鼻逸ゝゝ狭れ　力哉
黄ゝしてもそゝゝされゝつゝれ　古節
枝葉のゝ子ゝく来き入梅れ　白梅
ゝゝして入梅ゝゝ雪結れ　公
梅白人徒も亜れゝゆゝ　保吉
梅白養ゝゝゝ鶴ゝ　祐号
　　　

荒う角　ゆうたてひろうしゆうる
雑　夜　雑夜やりも豊新しの数
雑夜や芒はさきて一雑のれま
雑夜や毛蟹のとれ赤の茶
九月八日夜い雑夜とゆう
雑夜や亜有伏仏のとれろし
雑夜や仏寛の白の狗ふれ
毒ろう雑夜ゆれる枕
三日月にたや雑夜のうつり
雑夜不傳の恵れ打のう恵
雑夜や関夜に残る茎の赤

蒐古
今解
菟お
公
蹴蕎
白桂
几菟
保吉
寛城
測石
士仏

廉の尾に雑夜のりうり
雑夜や火のひろれ打ろ
雑夜のうしおを桂のうれ花
雑夜や人に尺ろ〻〻解の宛
き里の雑夜球るよりうれ
うう夜の明るうる不外の風
雑夜を毒るや牡丹れ花の上
雑夜れ活りるる鳴ふれ
波浩ゆれに雑夜ゆ〻的れう
雑夜れるくなる毒蛍〻れ
うしゆを尺波れ外の雑ゆれ

長罪
可拡宜
成員
宛来
不寒
古桂
乙二
公
月化
月居
素楽

濁りなき出でも蓮さかぬ泥の
蓮葉といふてつるぬしの
見たる人蓮きあやまりつつ
なのしさやあの蓮さもあいうち
蓮葉なれ水の風癖とりうち
蓮葉なれ琴ゑきて素さり花の美
蓮葉のさもむけ立ちりうの美
蓮葉といふ人ひとりのたりうち
蓮葉や春なれ煙ぬきしやん
うしうは踏ちりふくちのうち
蓮葉ハうなれとりぬたりうち

申為
素卿
武陵
袁了
一系
陸奥
旦那
治光
鶴
等栖
代法
美敬
陸奥
十竹
能因
其水

○九九

蓮葉を役うく尖る松葉の
上歯のわけるきうに蓮しあの光
うなれうなれあもも蓮しとやうり
蓮葉を捉てすくやあ花の美
蓮葉にうくあるのたり糸
蓮葉なれきを生つ考の美
蓮葉や業陽ふ文に拾ふるれ
蓮葉やうれおえ蓮のうう物
うしうを出つれ白のつりたる
蓮葉

出羽
仙台
陸奥
仙台
代法
陸奥

車両
業丈
久藏
色艶
香風
梅卿
可考
岐山
美水
几董

如雪

明安春

明安春
沼安きあやあ絵書の勢きし巳
明いうくあの月やあの月

白槍
白毛
素卿
芎藭
遠晴
星傳
梅失
其大
白路
蒐古
然者

夏

夜

以安ず夜を注以の病られ
所を作る家を捧れ以安き
以安き夜の万も人れ工三夫の
以安き夜を引り年の間か
以安ず夜まやひ万の教ても
以安ず夜を注後のけさまの
以安ず夜さ人万して万てて
以いそく夜をそ万ち実し又伝の夢
流と松押金ひて夜の以安き
人まれやむ以夜の夜以
夜の夜のたまれた方の

夜の夜ハ楽れに起てや豆腐
夜の夜や拾ひ作ひ万ちまれ家
月ちまちまちたれする夜の夜不
夜の夜ハてにも異れしの上
旅人の夜の夜をりたれ
夜の夜ハ万流りたまりは
夜の夜を毎り松れ軽りられ
月星の才にまつ不夜の夜一時
いつまも夜の夜ハ万れちと月
夜の夜ハ警ち意ても以れう
むつやりき夜ハ夜にあり義尾

五月
臣九
士以
有心
被号
家兆
朱英
蒐之
葵子
樟生
長為

爻の義や二形して凡そ花
爻の義やとりるつる花 昭
爻の義やあるるれ月れ出る
爻の義を蘇来うし たる森さ和
爻の義ハ八れ卯の打のひうし
川ひろれ凡て流る流て爻の自
罢て来る井に除たり爻の自
出ひより市の市の之の爻の自
を沸れ兵和や爻の 力
表ろうとを望人を中爻の自
ものを踏ハ流て爻の力

一 系
寛松
陽弓
玄雄
宇自
樗元
蔓古
公
苦市
公
自楼

夏 力

所井を出る流て爻の自
ものを筋おて爻の自
表を人の様人頃ちり爻の自
村百のさそれ出るり爻の自
爻の自人ろそれ小ろ和
爻の自ろれてそ人山ろ和
口辺ひひしの意や爻の力
九常のひさや爻の自
爻の自やれひしくも足ろ和
和の行の上れ更たり爻の自
爻の自名もるきはそれ

公
家更
保吉
代吉
斗入
公
大江丸
又昭
士設
恒丸
猪六

爻の辭を見れば其の上
世志の風なるを爻の辭
なりと云ふ故に爻の辭
自明なるの事なり爻の辭
なるを人に訓して爻の辭
爻の辭人をして心を
開たらしめんとなれば爻の辭
人に先立て爻の辭
爻の辭永永時を
先立て爻の辭
うちはなれて出れば爻の辭

王筌
程壽
合
華湖
朱英
合
兄直
完來
年仁
可教
道光

○百二

なれども仁淵もやはり爻の辭
指書の抵のなるやはり爻の辭
傾をを毒る抵にもやはり爻の辭
この井に望まれての辭爻の辭
と人に云ふなれば爻の辭
爻の辭なるを未だ
晴の井まで爻の辭
なるとや爻の辭
爻の辭井の爻も俗なる
爻の辭なるを
而に見るあれば爻の辭

合
刀元
合
乙二
合
刀伀
異乙
李剛
岳松
魯語
支築

出るより手をとりて爻の辰
指素の二爻うれしとうの
淺草うりうりて枯ぬ爻の辰
つゐて来て氣四のとの爻の辰
爻の辰つゐ女八清る菜まさり
まゐれの辰りと出るり爻の辰
氣さの寿ん八兄氣爻の辰
爻の辰松より出ぬ牛文ぬ
爻の辰いつもやとおりより
さん方と四ゐまりる爻の辰
小車の養おりる爻の辰

養ゐ
蕉白
竹老
電機
雪竹
書高
其生
接生
遊嘯
家人
少海

白れ訓て都れにより爻の辰
家をて八寿るもむて爻の辰
夏いるるるれ遠ゐ氣爻の辰
陸魚れ表沢まて爻のつぐ
風ゐれ井角に立し爻の辰
松すし一爻ゐくの力れ竹り
小屋風のゐて山氣の爻の辰
爻の辰柳 氣ゐ松れり
家茅八位ゐりりゐ爻の辰
紙の毛のゐまて兄ゐ爻の辰
清さゐれ爻の辰や証判り

義人
優し
相撲
供図
寿夭
蕉狀
双葉
家子
崖
胡瓜
岩苔
代筆
文子
腰
服装

文の名めれとりてそえけり　心兼
印へそえてかしこそ文の名　金城
元善上や自製てりて文の名　梅岡
名の長い文のうり掛きて　鶴亭
筆を氣ハあるて文の名　長谷
あきりえてされしたり文の名　東美
文の名ちうこれ入れうり　陶里
相の末に出あなんうり文の名　龍仙
文の名の夢ときぬ名あり　米汁
因まりや文ハ名あれきしまれ　桑風
文の名ぬるられはれうり　雪風

蚊帳

文のかきほうるきしの名あり　文政
文の花あちこふの名の字を　卷一
あるも曲て出うり文の名　伊豆　省己
尺てをれハ明もなれ文の名　安藤女　其夕
文の名ぬをきられてうり　去節
名ちつれ蚊きき蚊の四隅ハ　蓑去
名立て蚊つりをしむ名あり　公
あるすし蚊吹蚊屋も抓うを　蓑お
蚊を出て内に赤ゆ才の長ハぬ　公
赤ふくふうきぬを蚊やの名　白梅
蚊きるし蚊よりも蚊の二ミれ　保吉

老子れ伸すさるに故あの弁
たることを考れ自ずし入る枕故あ
ることを考れ自ずし蛍を言ふる自然お
森て死れ八月れ死おそう蛍の内
牧良も久良も来て蛍のお
故あの月沙るの小風おるお
月八故あに墨てそろと出てそう
引とて松をさしそう蛍の此
へたれ八ものそろし蛍の月
夜そう故あも八の涼とお
蛍の月忘えんこうもかうう

春雨
雲に
鶯号
頭丸
有と
長翠
樗生
公
丈左
完来
年八

自の夜八故やのもやのうう
蛍八ゆう一調たるね桂枝
蛍汐て世八れまて森たう
蛍越ゆたるの蛍てやの涼
人の才も蔵にすれ宝や蛍の月
うやつるねうそやそ木の久ろお
り枕の宵れ八うやの白れお
とのの月のたよりうそ
蛍茅生や故あ一うそむうき
昔の戸やうやまもうる乾の宝
蛍つれ八田畑うそれ見ゆる

自石

自柳
月流
月化
岳格
梅便
笠老
偽外
沖お
鳴蛙
蛍刈
三度人
獻英

氏帳

文角　麦去　秋去　夏冬　白禾　桃舟　後の　子化　隆水　蓮去　公　去九

帷子

序人　其文　夏冬　拓好　冬去　去半　乙二　公　去和　異し　去剛

とのぶも悔子する四十めく
悔子の自殺清き嫁入か
悔子に和らぎの白のきき来る
悔子に きそく 年の夜見か
悔子や帆の夕見を元柳
悔子を見て むれそう大現
子これ ぬ 悔子すし新の孜
悔子や姉に和らぎ おし蛾
五指校麻子さるや辻うぶ
そうそうや浴るたるけしら
夏にすてはるしてつうし夏羽蹴

道光
寝物
星濤
雑咏
素見
惟平
憲実 芳雨
上ア 平馬
五和比老
年人
几董

辻の花

夏羽蹴

手の子に桃立陳 夏羽折
古年もそだけ八ゆし夏羽折
川越に高ア人命ア人手の
憲実 鳳角
藤取に子に元て宿し夏 元
塚の羽や世の人実れの夏元
地蔵の美蕾に蛙ると白猫
晩春ら芝や寸しき赤元男
そうそうに元雲らいて晩小
子に作しと晩布撥く咲元
元塚の羽も見そうそう晩川
桃人に常に作そうそう晩布撥
憲実 左吉

晩布

完来
美蕾
風角
夏羽
長翠
白麻
赤雀
蒐吉
樗堂
後物
左吉

俗謡歌の発生に関する下

六月

六月を横にしても歌にする
六月を原のすしき歌
六月は保原の流れきり
六月は中ものもちの親
六月は琉人に歌人原の
六月は指の先延に歌業
六月は小河をうてつれり
六月は海の沉に歌
六月は又版の一見

橋五七節

竜七
跨石
保吉
吉川
橋生
業兆
五月
万和
竜松

水辺月

氷室

氷蹟は自ら氷室の模られ
世の貢多くは井に氷のうつき
のつとりたるうち自ら氷室れ
氷の貢是も清きかうり
文氷室は氷室の名れ
ちてはあるうち氷室ち
仰れ有り此の氷室れ
久方の夏れ氷室の役れ
いまそるすれ氷室文氷
ちせるれ如ぬ氣れ氷餅
氷餅ちけてうれ自ら

夏氷

氷餅

一夜酒　竺高

祇園会　道元

一日の夜ふかくまのに生れ侍り　東吟

ひとり酒をもてあそぶ時

松風と名ぬる人を起こしつつ　光雲

九泉や人を起こしつつ　茂雄

旅寝をや貴船の原の風寒き　几董

為いまの夜ふかくすてし泉の咒　大江丸

永日をそれ〳〵なれし泉の咒　芝城

仏とはれ前に見えし泉の咒　一子

旅寝をや人の涙を九泉に　道元

旅寝をやれよ夜ふかくなれば　尺父

つるやそれ老ふかくなる秋うれ

萩さうく旅寝をもしも訪れ　雪渓

前の夜ふかくなる旅寝の入り日　文角

百姓の渡りやふかくなる旅寝の会　鷹赤

十六夜寝覚一や恭定吟　蕉右

子母沢もいそれにもれぬ恭定吟　護酒

りをかくる世既の十三夜　他力

接すてつくりとすし世既遠　道元

すしけや発寝すしたる世既遠　美伊文

引れたをそれ十三夜尽もし　風水

洗ふ心あれ打ちれた不尽訪　芝宋

やそれいろ人うく〳〵すし訪　鹿来

蘇子瞻

一瘡

道光

鞍馬帯代

半夏生

土用

出干

夏日

暑

蘇子瞻

一瘡

道光

宇橋

保吉

一茅

道光

旦て

宗瑞

清牛

武秀

蘇子瞻

風律

蕙吉

百姓

自然

一醒

武陵

兼都

今破

蘇子

蕙吉

蘇子瞻の詩に数ものへうえふしまして
牛代や雲の夜明を道せても
山梔子や帯代ふ
因ふれに遥遠の花ゆれまを交せ
西方の森たるる良もまを交せ
ふ〳〵見れば蓬蒿出る用わ
水面や出月の入を吟うれ
つれぶ用も蔵つ〳〵ふる出月入
をうるれよれて流る出わ
出干や世の干西孫房
母人の振袖見たり出干

蘇子瞻の書ハ作もふ〳〵出月干
出干やうつ〳〵見れば蓬
出干や家の孫折も咲る出て
出干や世にある人の暑ふ
出干や華に久〳〵ふ〳〵ふ
蕙吉や仏のあを出月干
夏の月も多る宇のそれの物
夏の月を尺蠖の歩〳〵
宇雪の波をしまふ暑わ
暑月や枕ひつを物り
この頃の蝶ふ人暑き暑

大使西に丹の色たる墨あり　金
いとゝの紙て墨きるえあり　晩蕉
りんの字宝墨あり　白樂
りんりの元ひ紙るあつをえる　茂州
端溪て書をを過る墨あり　金
つ墨し出て石の皮　曾
松ゆをえて地にたつ墨あり　弘臣
墨りや月をぬれたる布の墨　凡律
らんれんれ又墨きえる　保吉
墨りやとり集たるえる　祐昌
墨りやふの松に過ぐり　士敬
　　金

大塊の巻をあらく墨あり　金
墨りや形りく掛ふ巻の砂　松元
墨りや人の肩を二本まて　木僊
火を焚て墨をつむるあり　峰嶺
墨りを押をつをり碁の上　宋英
配据に如の多き墨　完来
月ひりえ墨ををれ流をし　帝材
つりと人に出れわ墨　可敬
墨りや月りりりをして　元金
墨をも汲末をえ墨元　丸元
墨りや万金の住まるえ中　玄藥

芙蓉　平角　陽子　白塘　卓池　雅吼　史千　白高　求古　とを　古徑

蓮の花もうるはしの木　唐人の名畫きりかけ　畫れる眼を休むる事わ　白はもとなれよき畫れ　畫りかれ事みる蘭も　柳も二丈をつる畫れ　もつしや畫を人のれに来て　畫りや秀博の絵に為松を　畫かれ所ちらしたる立ぶ　とを人あつそもあつしたるの子　新の色を砂ほるあをうれ

蓮のさもれハもの畫わ　畫りやんすきをハれのふく　十人の十色に寿る畫れ　畫家や命ちるけられの上　畫れ火桶又てるたりわ　畫りや博しずのハ河の上　畫りや角力とれ来る舟の方

芙蓉　天　白蓮　桂丸　畫白　入設　李峯　陽考　古節　立ぶ人　綾弩　弩少　丁陳

芙　天　白　蓮

畫りや天や畫へ　寄る等の先　畫天の白れ　畫天やんとれ　河の風　畫天やんとむ　鶴の穴　畫りや白蓮　とい　畫と　丁陳

夕立

白雲に雷ひゝきて夏の風吹くれ
夕立に打ぬれ切たる雨中か
夕立や只一村にすゝれ原
夕立やあたりもぬるゝ人いそし
夕立やつゝ筒取の人たより
夕立やまをつゝむ村雀
夕立や流出たるむら雨
白日に雷の響京はるゝ
芥の青葉の里ハ夕立に
ゝ家や夕立ゆてゝをうつ
夕立のゝふもそれゝ雨ふる

三井人
ゝ酥
晩蕉
百明
蕉村
公
白梅
尼清九
保吉
公
琦石

夕立や塊ゝゝゝゝゝゝ

夕立や雀ゝ丸の中
唐庵や夕立の青の松
夕立や軒て火を貴義の家
夕立や世ハ是よりもしき
夕立や蔦ゝゝ
夕立や走つゝ
夕立や二度に降る時の松
夕立のふりも尽さぬ
夕立の蔭の方そいそ
夕立の青と白くと花の咲

六戸
梅人
岱吉
祐昌
士敬
米英
可都里
屠蘇
一子
長角
道光
岳格

夕立の十はやかんれん水ひめく　乙二
夕立や雲の上の長いすきま　生梁
夕立のつりゆむ山もあれ煙れ　養子
夕立の先へ月のり板れ　武陵
夕立の氣に跡を蓮の上　寄閑
夕立の出橋ふる男れ　雪桂
ふるてたた夕立ふる　一茶
夕立に笠吹きく桂れ　路庸
夕立のふるりぬ雲　布枝
夕立の色てんすむ華り　儲文
夕立につりとなる牛の舌　一蕙

夕立や雲の白ふる杉れ　令堤
夕立や人も木の名のすま　松英
夕立れふを見てり蛇　序生
夕立やふれて降る沒ふ　百川
夕立や塚れふる蛙の立　三及
夕立やこカついて茅の松　虎睡
夕立のふも大きふん　古節

夏雨

夏の名井ふりの起り　越節
片窪や西月れる夏の白　長心
ふるるの河見て夏の白　一碧
夏　雲の白れ夏の雲　雲峯
雲の白れ夏の雲　古節

旱

雨　乞

天文九月民のなやみに堪ずして
白玉に星をかざりて
白玉やなみ立たれ松
の山ハちるまつのすがしき時
きの星碧に小笹の吹靡し
見てもく紅葉ちらせきの星
雲ちるなつかりあり雲
白ちる恋ゆゑしたきの峯
きの星白ずまうそのけしめ
きの星ずの山ぬるるもあり

○百十六

蓋物
樗氏
蓋物
菊三
晩春
合
蓋右
合
蓋物
白雄
合

虎泰の徒にあらんれて峯
下ちてき猶流の末やき峯
まれたれたれて峯
見ちてしきさるれのうて峯
ちてきれた抜子さ夜きの峯
きの星乗りてかいまれたり
蓋汁のちはてきれて峯
きの星りハ西へ山ぬの上
塔のロより立やきの峯
相の末ハ山りもあるて峯
ちもきの森ちる立夫ちれ峯

書阿
保吉
夫路
斗入
士敬
長翠
朱英
完来
三顧
五子
一峯

道光
公
武陵
尊原
尊雄
公
尾張
家人
兼也
東院
御中

扇

我尊
掛ケ
和之
古考
丹後
夏鼻
故東
李峯
義彩
儿董
公
白楊
玄竹

碎邪て牛の角うつ有れ
芦刈のさしてとる有れ
文屋り有のたしも仮れ
ゆれて打の世とる有れ
人の有ゆしとれ折もあり
軍しといてさるきふきれ
夕暮の恋につくる有れ
白巻て志くもむ有れ
まにおて涙ゆや濡有
りの九の有れ者る因れ
忙先ゆ堂をうちし有れ

保吉
帝言
宋英
凡全
冥し
出る
一条
竟拔
笥元
大商
鳥語

因

有

身うけれうつれハわくし有れ
り乗有もうけを吹きし
代ゆや表も有のさし有き
山中や有にのさるのなり
紅々の人志つけき有れ
朝りゆ有りもあり有れり
さ流をあるに行く有れ
極つけの因つ凡に来さうちハれ
身ゆさんに出有画ゆんゆの汁
ゆて志れ涙笑うちハに表の宵
うゆ藤の弟の恵志ようちハれ

学笠
護物
演藤
湖中
海南
竺鳥
六湖
菟志
芭蕉
白桃
凡菟

有

一百二十九

美業　大江丸
重厚　氏路
士信　ノ旦
宋吳　兄直
半兎　道充
菱子

伊予　武
越後　伊豫
武州　武州
一茶　魏前
岳翁　武州　几帆
茅丸　伊豫　吳天
一茶　道充
芝翁
仝
乙二

雪りの人ちろしき掛乞か　ちつ　素道
拭色やそのれ井ゝ寒ゆのゝ　筑紫　赤秋
陸奥の八松の古宝やり傘　俗は　晴月
うちよりれ常の面さたなむろ
傘洗ふる むるを来しゝ
傘うしろハ九れられゝ　用竹　服琴
板に入て之ゆゝを　傘　保吉
夏ゝて作れれるむ傘　天路
とゝ降ゝて来れ　傘　玄城
傘　丸　をあれ出ゝ　午仁
乙雨の産ゝ一　傘　道光

日傘

作婦人

傘にすしむし雪なし　傘　以分
雪洗　老木のすゝる　松江　几董
遠牛やまを拭うし作婦人　蕉左
ぬぎより打れそゝ作婦人　公
山君と夜八月より作婦人　宋英
氣ゝ世も降れ迄作婦人　可新
や雪の人ゝれ作婦人　公
降るや雪をいる作婦人
雪と寒る夜をゝれ作婦人　彦人
宇治夜の豆投ゝつ作　蕉左
人来しと晴れ雪ゝり作　丈左

抱籌　抱籌や夜明て見れば花芒　沙笠
籌枕　吹めけて打ふるめし籌枕　又明
籌枕　ふけよまる沉れ来ぬ籌枕　道光
拍作の家に對して見すし　菱子
すしさや家仕舞ひる井の家　玉文
すし凡や家にふるもをもるる　菊古
すしそも明りをてるれば　樗元
作すし古人むるんあり　明人
すしに鑵をうつ半の家　合
すしさや陸をまるる陸の家　白龍
　　花芒

凉

二三町ふんてりますし　沙言
すしさや花原の原の秋の子　凡董
すしさや変するちん光もたん　秋氏
すしさや木を動して吟彩　感吉
村ゐや彩の尾ふる茅すし　保吉
すしさを家して人の座る原れ　陵石
月人の座てすしき処うれ　合
すしさん死ぬ松るたん一枕　氏明
すしさや片よりて峰の家の服　斗入
すしさや凡ふるふるつ見の家　梅人
すしやとりくれ光こゆる　吉川

さしもの草くらべる子孫かな　尾崎
月すしたちられかるしの上　恒丸
琴を来てすしそうたり楓の上　士紀
月の出もはんそすしや松の月　仝
さしもや麻れてれたる素遥　若菊
さしもの子りに金る蒔れ　耀史
さしもん蜂しさん枕されそう　呈笠
さしもハ田金に見ゆる夫婦れ　栄兆
さしもの人大るハ抗人く　雪之
さしもやたるに高老の良　朱英
さしもんいそれ命活めへき　仝

さしもや氣孫に丸に入　可紀望
さし見や天の原より田より　仝
さしもや撥もたるめ松れ磨　不蹇
さしもやるの赤ハ文の赤の　定雄
入られさん人さし淵の流に　月丸
さしもや下弦も赤世も二人ぞ　道光
さしもをいれにあれそう麦の波　仝
さしもの子りも赤さめ月夜れ　無艶
出掛をゆられてさし夜の蛍　平角
さしもや流ひつて来てり　玉房
さしもん退て月行く赤世れ　素迪

さしさや根笹に牛もつれて
さ風に麻のついたる門田か
市よりて志そうさし猛の雪
紅葉や汁の実を拾ふ蓼の海
さしさや松をちり来る嶺の猿
さしさや陸のよりつく牛蓋
さしさに伝作の業なり雪摘
さしさや人を見るくに渡の氣
さしさを忘て森る木下か
さしさの多ゆるそのの多遊
さしさや芝人見るもみつるに

蓼机
瓜
竹老
一葉
去為
魯原
雪閑
白境
蓼之
笹茅
雪笠

ねたりねさし垣の子
鶯さしさるれて拾ふ人より
空清てさしくなりわたるの門
見ゆるにより てさしや水の渦
あの家にたれさしや人の氣
さしさに迎のけもきに小田の雪
えくとさしうるし炉か
人屋とさし垣垣もなれや
風さし枕屋れるこ越こて
さしさや笹の雪のかし牛又又
さしさや小笹氏の雪笹の枝

後場
家人
冥也
雪橋
芦茅
玄猪
載雪
對こ
白考
小牛人
又角

氣のこれをもすしき新のこゝ
よろこゝろをもてもすし氣人
數の春るたてすし芳氣
山風のすしるてい人も来れ
すしさやうけ芳花のお
小よりにすしさろる木城お
すしさや老たる氣をすろる
九すし達もこのつ川向れ
すしさや旅のよにしのお
すり風やはるれんをもすき
たろ氣ハ六氣はの風すし

春哉　女きよ
扇景
美南
與人
武秀　白寿
路文
尾張　天道
鄙鶴　送扶
陸奥　栄石
仙台　英峯

納涼

すしさを涼て笑を不覚頭手の
涼しさ家てすしきを長お
すしされるもさゝゝや藪の百
本に行ものや涼しうゝ多る
涼しさや山地ちんと美に来て
すしさやいきゝくるに乗ゝて
涼しさお小笠の扶る丸流
すしさや美にうちぬ所留流
すしさをゝるもいきれしの氣
今樹ゝ作にあるりゝ　涼
松の系もよゝ尽れ手きれ

江戸　李天
泉川
武秀　東夜
江戸女　抱弦
汐里
木老
秀郎
下総　孔樂
秋川　砂考
柳花
女子代

狡赤き魚沼に出んとすれ
芦にのゝ立まして見る涙れ
湖水の尺くれたりり涙れ
四ひろ歩んとすれ
下すゝ月えくれ木の葉れ
中しやんこむ会歌の下すを
道のけて太の中をくすれ
秋中ん酸所も見て夕涙
ゝれを拭くゝれし公を涙
秋くふを言士すゝうれ
外もくし者もくしタすゝ

晩菊
多酸
菊花
蕈を
栗文
白桃
也見
几菊
公
集吉
牛入

稀ゝ人八松まくしうノすゝ
くくくくくれあたり背
涙ゝくくん涙見士況諫
たのしさや外をくくくくタ涙
つすゝ嬉もくくおのくうち
くくくくく

力代のまりしおるやすミ永
業佐のうえれてもあり久塚　菅家
人志ふるみ野ふり川塚　佐泥
つ塚ミ人の業ふれとり　定雅
オのうえ続ちしとつ久塚　一系
方もくれ産ふ元ふ産すミ　公
毋ありと詠るのありつすミ　月記
久すミ系硯の矢を採をり　木海
をしみの中ゝやれり塚永　竟松
ミ見れ方のつ長ちすミり　業百
ガリ山産ものいふ人ミうり　雪筆
百池

産仮のミ中ゝうちゝ久すミ　渡詞
発白する工夫もちるや塚永　尊頂
ふれ矢を打ふて戻る塚ホ　養ヶ
投手れ示さるふりり久すミ　女志字
百すそもせるつりもすミ　業也
あちゝうら乳を来て元つ塚　瓜桃
警ハ方ゝ寄羅ふ元久塚　佐泥　詠因
すむ産れ良ハてふゝ和　来　月文
二ッまを七寿に産ちすミ和　流詞
産ホもま育すんていすミ　佐泥　文路
り平の中ふれ松れ久すミ　吾友

菱笠に石をつゝみ源
源其ものゝうるを枕れ　伊豆　斗園
麦藁の糞火さゝしつゝ　信濃　雪麓

風藁

風藁もすこれ程ハ核うれ　保吉
風ふるる藁の程さゝ白の沼　仝
橙のくゝるまゝ〻ハ風ふるる　道光

寺水

風ふるる夢や鶴場れ藁仕　乙二
曙や夢ゝ見ゆれハ風ふるる　幾少

法ゝ

搗ゝ夢も涼しやつの月　一茶
宮素ゝくゝとそゝを歩れゝ　金花
二人ゝてむすへハ濁る法ゝ　茂村

石工の鑿冷しゝうれ　仝
陸のすむ数ゝ見えしうれ　ゝ陸
ゝ吹ゝ功花さゝしうれ　凡兆
撫子村の素を流ゝしうれ　仝
一ゝゝ呑てゝりのゝしうれ　百池
八九月岩を見ゝゝしうれ　左池
立夢を見て迯ハしうれ　信濃　源城
住むゝゝの狩ゝわしうれ　藁左
ゝ寄りゝ一本ゝゝきうれ　白桃
冬ゝゝ法ゝのそゝ人ゝのつ　伊勢　石燕
立夢ハ物ゝ見ゝしうれ　五池

時々や陸奥の小柳手
覆れ笠をちらしうわ
ふ山ハさるかうしろ
ひやうと田れたしうわ
石を押れ夜の露ふ平泉う
ゆのアれ陸くしひつのうわ
人も訪れ来れやしうれ雪
雲花てつれ消しなうわ
表広れ氣令松くしうか
陸奥れ心氣見て色わ松月
荷ふる柴れふる公ふしうわ

たかうかうかつ力ちき陸奥わ
氣分を見とけてのうしうわ
君ハ代のひの分千年しうわ
ひ陸奥ハ酒ちうハもちれうう
半日ハ茅ハ苔ちれ平しうう
松見とくれ手ふるしうわ
ひとうとうとうちる陸奥わ
てをされハうれうりしうわ
枇の花のちる陸奥ハ時ハ陸うう
人分の松て古ふるしうわ
鶴をもてれ陸奥ハ志

宮笠
亜陸
遠晴
庵人
万和
漫て
久感
十寺々
小尼
湖水
菜鳴

晒

井

ゆきゆけハこれなるこの田の月夜
むさしあをもなるときしるれ
松の木に沸先達の居しうれ
るのしろ沉む松の石にるれ
徒の毛の酒うちもしうれ
亡佐ゐ沸きいんの陸色ろ
自をやしろのそけハむしく
晒井やしつりてうの寄
けらし井や家変ろ家の居と
晒井やすしさうのさ濁り
さもろ不ん寸むけるれ寄

呉老　養頌
花は　双鳥
鹿矢　寛兆
伝は　方壺
拔は　桃杯
左節
百吟
蕉左
鹿矢　寸車
故拔

麻地酒

心　左

ふるそうや新さへ見ゆる麻地酒
ん左さうしきん新にの三千丈
ん左酒へけさハ酒くへ
酒尺ゆる夢に来うれん左
ゆうう井や小魚と拔ん左
九ん吟へ夜ハ九ん左
余ふきき良うへてそん左
ハゆうりやうの尺てゆうん左

菊　水

菊ゆや深へう廛を広ちき
菊ゆうにうつて蛙光の良
宗澄に菊ゆうの大長九

花ず　一　拔
姜杓
戸吐月
長高
一菜
寛松
宋年
書記
凡蕉
姜杓
太

世尊てのひ者ものまりわ　壞奚　李投
者ものや茶碗ようつくるの上　宋　車蓋
ものを抜やひのくるまて　蓮左
ひものをくちに光やをやし　瓜　廬風
人ものから隨にまれたをやし　瓜　一茶
仲ものくく白一的やをやし　瓜　琴二
柳ものれいものの物　道的ち　宋英
冷汁やをにたくよをの年　義　英十
ものの粉のすのふれたをの年　義　英
ものの服に枝にし形まを　伊勢　景ひ
ものの服に浸ゆし二り蘇　樗良

冷物　松
于服　蓮投て月をちるの　青丁　米堯　推已
于服や花さくや形の畫　雞て
梅干　春くやや梅干にして一盃　道堯
香霜散　ものくも蕭にまくもを夏　瓜
蕨椿　豆椿るやも行月八りの　桂堂
漆原　木のくくの光る眼さしや漆　芳角
世いくくくもくを漆の木　又助
枇杷　むつくいを原くの市の枇杷　東　瓜流
楊梅　やすりに毒くを口を探しくり　樹は　秋凡
李　茶くの赤い李を茶く小お　一茶

晩の晩に鳴きすまれ　鶴光
つゝとは秋にうしはこれ　宋英

林檎　百日百

たれか咲くしてて百日百　女子代
咲きそめ百日百にてるかれ　百路
さそなり秋にかのうつる　五路
白月をうつしもるこの百日　恒丸
蜀地蓮の新の蟬や百日百　完来

百日百日まも咲かれすし　来
二日月のはしたれ見たり百日百　美宇
蓮開るまを待つやさそなり　秋史
開るまく蓮の新蟬百日百　東陸　蘭兆

蓮の新

百日百

蓮の新の百日百
蓮の新に夫の百日百
蓮の新に秋風ちるき春か
蓮の新月のなを花る夏春
夏花蓮の新に秋の海
蓮の新の春やはるれ吟
蓮の新　姑
秋の春の春はしき春
河骨　河骨の入時を見の春
河骨の蓮の新　深

百日百　大左
蓮左
百日百　宋英
道光
恒丸
完来
松雀
柳起
吐月

の貴や見江を立てる新田　柳翠
貴達や扱て白ゝ立りける　去来

菱花

時の菜を抱へて坐や元の花　左右　遷京
六月九ゝ元年の水　雑咏
白や元ゝ元ゝ八ゝ月つゝ元の水　其爪
元ゝ八ゝ月ゝ元ゝ月清　不昔

蓼菜

海松

ゝ庭に見る海松の元ゝ　流水　陳酔

蘭花

ゝ元ゝ八ゝ元蘭の水の夢を覚ゝ　尼素月
蘭の水や槙の子のゝ元　雑咏
蘭の水のそれも白の宋ゝ元　伊勢　李東

文字

文字や元ゝ元ゝ元ゝ扱　翁　蓼太

文字に探幽の加ゝ元ゝ　人　保吉
文字に元ゝ元ゝ元ゝ新ゝ元ゝ文ゝ八ゝ　陵石
文字や文に小菊八水の咲　士朗
文字や一源ゝ元ゝ元ゝ水松
文字に元ゝ元ゝ元ゝ男ゝ元　陸奥　鶴来
文字に水ゝ元ゝ元ゝ姫八水ゝ末ゝ　如星布
文字や物明ゝ元ゝ新八道の元ゝ　李園
文字や井ゝ元ゝ元ゝ次ゝ元ゝ新二ゝ　竜松
去ゝ水ゝ元ゝ元ゝ元ゝ元ゝ元ゝ文の字　北元
刈入て扱文字に元ゝ元ゝ　扶支
見ゝ元ゝ八ゝ元ゝ元ゝ見ゝ元ゝ文の字　帰来

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麻をうゑ女あつまれや　蕉
麻刈の麻ぬるあらそはれ八そ　又四
麻赤く地切りに刈ねば畠か　自燒
さゝへやゝの杉てれ麻の雫　保吉
麻畠や向ひの場の支えうん　長翠
歩まれ麻の蓮ハ白れうまま　瓦全
白の景ひうどおや麻畠　道充
麻刈いつれうくまれる蓮か　青閑
鶏の活て云うり麻の雫　雪橋
歩まれハ雫もすしや麻ゑか　青人
女の児ゐり越四に麻すうり　護物
力呼

麻刈て稿素の秋くゝ雫れうり　乘乳
麻刈て松風とうる畠うれ　雲閑
麻畑や白のよこれを拾ひ麻　伊内　沙玉

蓋刈

刈蓋に十美自人小白や　道充
蓋刈をいふ所とまくく　久臧

緯花

英うの市さ有人や緯の花　相撲　巴水
でハそれ千りに出人や緯の花　雲皮　周白
類白の雫ゆ一色緯の雫　微風
木ふりうり白るうれ咲や緯の雫　沙蓋
蓋花

杉の矢に古こゝとつれ蓋の雫　桂九
蓋雫や筏うくへてゆ　蟾　巻川

蓴菜や素の心うら庭にて出て
蓴のふるうてだ秋て庭の凡すき
ふれ形く敷をもつめて蓴の心
蓴のふ樽夏たる本性や
蓴ふや入江の風の吹の庭る
吹ふるすれ凡さへ蓴のふ
夏　蓴菜　麦飯に交蓴のふ風うれ
ふもふて交蓴の麦ずい
穀子　穀子ふの麦つとさた屋の滝
穀子花　屋屋やのり出てて吹ふのの上
旋ふやこの五庭の二十里

蓴花　蓴三　蓴閑　蓴人　大呂　琴松　恒九　陝船　子代　武成　蓴水

ひる屋や吹ふう吹て麦ちふ
屋屋やふの心ふ入れに麦れ
穀子ふやりれいろと落赤き
屋屋やとふれ麦も引れ麦れ
ひる屋の花肩ふき女うれ
屋屋のふれ蓴つ心ふうしや
屋屋やいて星の色れ出る
屋屋や物も逸ふ寺白ふふ
屋屋れ吹ふうふ麦の肩
屋屋やふふれず麦の庭逸も庭れ
屋屋やふ麦延んとて文ふふふ

蓴花　蓴夏　蓴玉　白蛇　也三　又恒　恭吉　諸九尼　春亜　吉川　恒九　鶏路

夏衣に移の醤をゆるがせり　又橋
夏衣不親のくんをなつかしらね　きせ
夏衣にうく孝る人と松の陰　白柳
夏衣や半史費素にうけて　道堯
夏衣れ不て凡られハ竜巻　一学
夏衣と寄へと之のたすける　岑閑
夏衣の白に安るこゝ心地かな　桂史
夏衣やうつもたのこし垣一竜　万和
夏衣れ方と差ゆ出ちれ　素親
夏衣や氣ようう老しなるの子の　右橋
捷ゆ吉氣こし桶ゆしで　湖井

夏衣や万二節の塀のと　芝山
夏衣〻衣寸るゆて寸ゆう　黄雅
夏衣や梳の心じらね　雄嘯
夏衣や花に名れる夏の月　野春
夏衣の変に花れる学もち　岳文
夏衣に裏吹ゆる木陰れ　鶯典路
夏衣や弟の弁ちる夏れ　松江
夏新の弟や陸ちる学の中　古節
夏衣や支帰して樽の夏ゆ　多藤
夏衣や裸て房る人の形　瓜
夏衣の弟ふゆちる崖れ　晩芸

夕貞や[illegible]されて[illegible]蝿　合
夕貞の[illegible]や[illegible]の[illegible]と　蓼太
夕貞の花[illegible]猶や余波の　芝雨
夕貞や花に嵐の[illegible]　百池
夕貞や[illegible]の[illegible]て[illegible]　白雄
夕貞や[illegible]しの[illegible]　鳥秦
夕貞も[illegible]の[illegible]　岱素
[illegible]ハ夕貞ハ[illegible]　合
夕貞や[illegible]　早雄　東里
夕貞や[illegible]　猶[illegible]　松後
夕貞や今[illegible]を改め　大江丸

夕貞や[illegible]て[illegible]人　存亜
夕貞の花の[illegible]の[illegible]　淇川
夕貞の[illegible]の[illegible]　士翠
[illegible]夕貞[illegible]　木僊
夕貞や余波の[illegible]光　栄兆
夕貞や[illegible]の[illegible]と　米英
夕貞や雀の[illegible]の中　方子
夕貞や[illegible]を[illegible]一枝　午仁
白[illegible]夕貞[illegible]　完来
元[illegible]夕貞[illegible]　岳鈴
夕貞や文[illegible]の[illegible]　桂里

なしうり　夕良の咲て口ゝ開
夕良や二布うりしも垣のそば　養子
夕良に子にも見せたき面白し　寒松
夕良やうり売さるのうり　其柴
夕良や見来やそなたの雪　尺三
夕良の花しをしをしたる　寒雪
夕良に伽うれたり香物売　梅史
夕良や深て立る世の安し　長寸
夕良やとゝ出来たる牛蒡　河川
夕良の詩も出来たり蒸なか　帰来
夕良や雪を掃れし人垣　汝里

夕良の月ハ逆に昇りけり　孤芳
夕良ハ変て甲斐なる花なり　下坂　麦孝
むら花にうしなはれて去　一葉
月乳にうるまれ出る　孤雲
去年やさらしむ家のつるけ　嘉義　晴二
新麦や昔九月九利久垣　戸　汝二
小麦蒸　垣根のうるはしの小麦うり　一葉
瓜　さらして瓜むく彩のうりあ　柳也
胡麻くゝり瓜うり　女　葉
瓜の良に狐嘯うる月　白燒
瓜生うり馬にうるまれ　天路

瓜盛む人やなぶの出来人　重厚
瓜くへはりして美うり猶の蔓　養扨
瓜の実に蔓ゝ枯れ小蔓　美字
まれまゝ花やうの瓜作　接密
初瓜に二日月うる烟　兵蒙
瓜をまれ八月九月　吉成
たゝるに中分ちて美菜　冢丈
美菜むく〳〵元せしい中　壌美
うのしうまれ美菜瓜　百姓
菱ゝうり枝へうり初ゝは　百姓
南瓜もひり蔓うり七枝まれハ　木僊

瓜
冬瓜
瓜
南瓜

鷹羽老翁　羽ゝうしにたるゝハ中元松の雪　護国
鶉　巣にたの心麦刈ゝ孫を者　鏑宮
夏　宋　片羽燃て飛ゝうゝ文の七　冢丈
池大に坂ゝ池ゝ文の七　白雄
大ゝり七又大ゝして坂ちゝり　晩蕉
文七や坂ゝ扇ゝ恵諸　百姓
月ゝ蔓ゝ蔓ゝ七ゝ枝ゝ大ゝり七　陶石
海ゝ中て七の羽蔓ゝ茂烟　臣丸
大ゝり七ゝ文ゝ蔓ゝ烟　奇笠
大ゝり七ゝ張ゝ蔓ゝ七ゝ　岸雁
ゝ中ゝの月ゝ蔓ゝ斬ゝ大ゝり七　九紀

蓮

大きなる花咲きつゞけてあるなり
ひろき葉にこの葉一のもえ出でたる
蓮の花や金魚の泳ぐ水の中
橋の雪もとけて来るや大きなる
花の咲くや現に蔦の大きなる
如雪のうれと絡みて大きなる
万葉の新芽や交の中
蓮を出でゝ人や庚午の年
蓮の花咲きつゞけたり未の
蓮の葉の間つの咲やえのころ
蓮掘ゝ子石松の月あか

蓮葉　蓮池　蓮の実　蓮の花　蓮の葉　蓮掘

打の孔ゝ人形ある蓮の花
松風に吹ちらすや蓮の花
碑硯のふんや蓮の初めの
蓮ゝてゝ蓮の月はあれども
よへかや蓮ゝさねさそ踊るや
蓮掘や居ゝの松かうけ
海棠の実にうなし蓮の花
蓮掘る船ハ浮くひに出でゝ
蓮ともう見るこゝはこゝに井の月
七尺の屏風もこれ乾床の蓮
蓮の葉て意を手ゝ人ゝうし

大江丸　蓮の花　上島　直江　宇洋　天柏　以今

蓮の実　蓮の葉　蓮の花　蓮掘　蓮の実　蓮の葉　蓮の花　蓮掘　蓮の実　蓮の葉　蓮の花　蓮掘

蝗　蚊　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

毛虫　蚊　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

魚　蚊　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

金亀虫　蚊　川　狗

蚊　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

蚊　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

川　狗　蛾　蛍　蝶　蟬　蟻　蚯蚓　蜘蛛　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇　蚯蚓　蟹　蛙　蛇

小鮒　月白　菜芸
鮒釣　斜　斎人
海月取　贈を押れも却て　塩芳
沖鉦　沖鉦　白鷺
沖鉦　沖鉦　晩芸
沖鉦　沖鉦　蕉去
沖鉦　沖鉦　東陸　村江
沖鉦　沖鉦　白梅
沖鉦　沖鉦　道光
沖鉦　沖鉦　長角
沖鉦　沖鉦　一茶

祭

蛸しをを沖すし茶か　久藏
交氷楽　深月に氷を交氷茶　芸村
月折　使　夏製の折月すをる使　律大
夏月きれをり使や男　京
沖　鮫　きをして命時き鮫か　芹子
人去て鮫尺をり責鮫河　樗良
本沼に文学に鮫河　蕉去
魚の去に学平る鮫や文鮫　太
生をる折豆て丸鮫か　芸村
たをいの流も沖鮫の夜　白梅
蓮尺をしをの文学に鮫か　保吉

笹の葉に[illegible]
[illegible]
[illegible]

子を産れて産れ給へる事明か
二交月を為へ出れば産れ給へ
ふるふるんてわけるちれとうれ
ばうて交ともわれちれるか
月をやちのとそうし人の上
ちしらわ神々合れたるか
至孫完て松凡に狗の産しか
交の爻を見す毎の枕うれ
ちうやを孫起を八ッかり
交癒れ乳骨揺る孫光か
交癒や別て夜の孫にゆく

大江九
方ふ
孫星
不寒
乙二
岳絡
保吉
揺巷
道光
蒐右
表淵

交癒ハ男らし子ちうう
交癒やけを咲狗し月木横
交　雲　横ちを出ばうして交の
交の子ちうれ月孫ちうう
交　ち　交ちの白一色に孫にうり
交の心ちうう刺ちやうう
交をの文を九ちる鶯ちれ
傘に傘ちうう交の心
ちうやしちう魚ちう交の心
交ちを凡て立ちの心　れ
交の心大石ちしちうれう

春栗
松清
立春人
雪頂
保吉
天明
姫九
朱英
蒼之
南ち
張ふ

文ひや紫つし遥さそら　遥麦
文ひや戸口なる素のつ　人
文ひや雪の蔵なる因場うら　右橋
文ひや灯桃提て下話の雪　九秋
文ひや女に雪て松をし　唐　支流
文ひや月い人のとをゆく　走　鶏秀
文ひや塚に遥さ雪のま　松石
麦れてうしず素ふ文ぬか　蹴甚
牛ろに一節ゆれる文ぬか　士弦
雪遠にかさし文ぬの雑まか　昭九
ちるらふふ至ふれり文ぬか　宋英

文

野

文

川

蕨も雪に高る文ぬうれ　甘苦
りるる沢に風ふり文ぬか　完来
鶏雪もメ雪もさる文ぬか　月雨
一雪の鶏に高る文ぬか　手馬
文ぬや魚にうう小鶏鈴　雪石
文ぬや地に寸ぬるの姫　鶏踊
文ぬの蛇の花るさるし　昭九
文ぬの末尺て雪る月雨か　尺笑
文ぬや雪に入る氏凍る氏　紫　左角
文ぬの文り灯るもいん　石鶏
文ぬて米炊て雪る大　男　下弦　夫陵

夜　海　夜の海一帆ての嵐哉　渭北　挑星

夜　海　夜の海入日つゝうつゝかな　玉壺

夜　海　夜の海やたゞ流ても夜の舟　仲六

夜　海　きりあつて見て仕舞ふ夜の海　蓍之

夜　海　嵐の後ゆるゝ夜の海　誘鶴

夜　海　ちらゝと夜ハうるゝ心の海　素堂

秋　近　秋近ずやや横ふ天の河　芦

秋　近　秋近き宿のうつゝ寝　嵐六

秋　近　秋近き心路や松を忘れ人　平角

秋　近　捉るに秋近き夜と知れうゝ　護鶴

秋　近　秋もやゝ近き鶴の頭哉　甲夫　洗平

雨考

晩　夏　夏果や雨にうしろ千れ子　孔徳

晩　夏　月夜のきしく寄るゝ夕ハ　保吉

晩夏之秋　ゆゝ立月も杉ゝ夕ハ秋の雨　姫丸

夏　鶯　この雨ゝ秋にかゝるゝ　蓑雨

夏　鶯　夏ゝ雨ゝ日雨れてゆのをいそく心　大江丸

夏　鶯　金時し月の樹　尼ゝ　可都里

夏　鶯　花ゝ夜人のこゝ月四月ハ　樹光

夏　鶯　夏ゝて人良尼ゝ人ハ　宋英

夏　鶯　囀や一輪牡丹尼ゝ　蓍之

夏　鶯　夏ゝ雨ゝ鶯ゝ雨ゝ雨の雨　吉牛

夏　鶯　心の四ハ夏もやすゝ鶯しハ　道光

入吉の時しき文と来れとも
心標や古を尋ねる文とも
そもそも文にすると云へ共
何ものや印をもつる文の乗
文もくや格を本法の料理の弓
夕多ハ文のまゝ　松　弓
村自ハ吉ものれと文ハ来る　嘉

蹄弓
寛松
古卵
雑咏
碓合
帷子
方解

培堂
華山